高等学校

平　成　12　年　度

教育研究員研究報告書

地理歴史・公民

東京都教育委員会

平成12年度

教育研究員（地理歴史・公民）名簿

No.	氏名	学校名
1	佐藤創一郎	都立戸山高等学校
2	渡辺純規	都立玉川高等学校
3	山田美保	都立大泉学園高等学校
4	北原淳弥	都立向丘高等学校
5	関口英之	都立城北高等学校
6	今川恭一	都立水元高等学校
7	濱田准一	都立深川高等学校
8	杉浦理花	都立深川商業高等学校
9	尾澤聡	都立町田工業高等学校
10	佐向顕	都立武蔵村山東高等学校
11	沼田大作	都立青梅東高等学校
12	萩尾慎亮	都立福生高等学校
13	森義輝	都立久留米高等学校
14	小林正人	都立田無高等学校
15	西尾理	都立小平西高等学校
16	大山敏	都立府中西高等学校
17	梅原康弘	都立南野高等学校

担当

東京都教育庁指導部高等学校教育指導課　指導主事　高橋基之

都立教育研究所教科教育部　指導主事　横田浩二

研 究 主 題〈地理歴史〉

主体的に学び行動できる資質や態度を育成する指導の工夫

研 究 主 題〈公　民〉

現代社会の諸問題に対し、主体的に考え、自ら課題を把握し、判断し、解決していく資質や態度を育成する指導の工夫

目　　次

地理歴史

主題設定の理由と研究経過 …… 2

Ⅰ　異民族・異文化との共存を考えるための視点 …… 3

1　旧ユーゴスラヴィアの解体と民族紛争 …… 3

2　バルカン半島における民族対立 …… 5

3　国際協力に見る異文化との共存 …… 7

Ⅱ　日本の国際関係のあり方を考えるための視点 …… 11

1　幕末日本をめぐる国際環境 …… 11

2　日本による植民地支配下の朝鮮 …… 13

3　20世紀初頭の国際関係と十五年戦争の始まり …… 15

4　サンフランシスコ平和条約の成立 …… 17

Ⅲ　アジアをめぐる文化交流と交易 …… 19

1　中国仏教僧のインド旅行と東アジアにおける仏教圏の形成 …… 19

2　『世界の記述（東方見聞録）』から探るモンゴル帝国における東西交流 …… 21

3　「陶磁器から見た世界商業の進展」 …… 23

まとめ …… 25

公　　民

Ⅰ　主題設定の理由と研究の経過 …… 26

Ⅱ　豊かな生活と社会福祉（第１分科会）
—ライフプラン作成を通して将来の課題を追究する「現代社会」の授業— …… 28

Ⅲ　望ましい政治のあり方（第２分科会）
—擬似体験を通じての将来の社会システムを考える「政治・経済」の授業— …… 36

≪１≫望ましい政治とは何なのか考えよう …… 37

≪２≫民主政治の大切さを知ろう …… 40

≪３≫民主政治の基本原理を知ろう …… 41

≪４≫現代日本政治の諸課題を知り、望ましい政治を作るための行動を考えよう …… 44

Ⅳ　分析と考察 …… 48

研究主題

主体的に学び行動できる資質や態度を育成する指導の工夫

主題設定の理由と研究経過

第三の産業革命をもたらすと言われる情報技術(ＩＴ)革命。パソコンや携帯電話等、生徒の身近な環境の中にも、その流れは着実に浸透してきている。ＩＴによって情報は、瞬時に世界を駆けめぐり、社会を大きく変革する。このような激変する21世紀の情報社会を生きぬき、平和的・民主的な国際社会を建設してゆくために、必ずや一人ひとりが国際的視野からの判断を求められることになるであろう。

そこで、本部会では、こうした21世紀に続くであろう時代変化の認識に基づき、生徒一人ひとりが自ら課題を設定し、考察・判断・行動できる資質や態度を育むことを目的として、以下の３つの視点から、この研究に取り組んだ。

Ⅰ　異民族・異文化との共存を考えるための視点

冷戦終結は民族の対立や融和と経済のグローバル化を招いた。国際化とはこの文脈の中で理解されるべきであり、そこで必要となってくるのは異民族・異文化との共存の能力である。共存に至る過程には認知、衝突、譲歩など様々な相が見られるが、本グループでは、異民族・異文化との接触から共存に至る過程の諸相に対して、バルカン半島に於ける民族紛争と国際協力という２つの問題を取り上げ、生徒がこの共存能力という点に於いて、主体的に学び行動できる資質や態度を身に付け、高められる指導の工夫を試みた。

Ⅱ　日本の国際関係のあり方を考えるための視点

これまで、わが国の国際関係は、経済大国としての優位性に依存する部分が大きかった。しかし、これからは、激変する世界情勢の中で多様な視点に基づいて、再構築されなければならない。21世紀に生きる日本人として、国際関係のあり方を考えるためにどのような視点が大切なのかについて、生徒一人ひとりが自らの課題として学習することが重要である。本グループはそうした観点から、「幕末日本の国際環境」、「日本による植民地支配下の朝鮮」、「今世紀初頭の国際関係と15年戦争」、「サンフランシスコ平和条約の成立」を題材として選び、生徒が主体的に学び行動できる資質や態度を育成する指導の工夫を試みた。

Ⅲ　アジアをめぐる文化交流と交易

国際化や世界の一体化が進み、人的物的交流・接触の機会は限りなく増加している。それに伴い、自国の文化を認識した上で、多様な文化を理解・尊重し、複眼的な視点から物事を判断できる生徒を育成することが、より一層求められてくる。また欧米だけでなく、アジアとの国際交流の比重は、今後ますます高まって行くであろう。過去の時代にも、アジアをめぐる文化交流や交易は、盛んに行われてきた。アジアは長い間文明の先進地域を抱えており、そこから派生する交流や交易は新しい豊かな文化を創造し、その後の歴史に多大な影響を与えた。このような歴史を学ぶことは、国際社会に生きる生徒の資質を育成するのに大いに役立つであろう。そこで本グループでは、「東アジアにおける仏教圏の形成」、「『世界の記述』から見た東西交流」、「陶磁器」を題材にアジアをめぐる交易と文化交流の視点から授業展開の工夫を試みた。

Ⅰ　異民族・異文化との共存を考えるための視点

1　旧ユーゴスラヴィアの解体と民族紛争

(1)　**教材として取り上げた理由**　　第一次世界大戦が終結するまで世界地図にはユーゴスラヴィアという国はなかった。ユーゴスラヴィアという国がつくられた地域は以前はオーストリアの領土であり、オスマン帝国の領土であった。第一次世界大戦後、スラブ系の民族であるセルビア人、クロアチア人、スロベニア人、モンテネグロ人、マケドニア人が住んでいる地域にセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国（1929年にユーゴスラヴィア王国に改称）がつくられた。住民の多くはキリスト教徒であったが、中にはスラブ人でありながらも、長いオスマン帝国支配のあいだにイスラム教に改宗したスラブ人もいた。また、キリスト教徒であってもカトリックもいればギリシア正教徒（セルビア正教徒）もいた。そして第二次世界大戦終了後、連邦共和国が成立したが、ティトー亡き後は、以前からの民族対立や経済の地域格差に対する不満などから連邦は解体し、各地で民族紛争がみられるようになった。21世紀の国際社会は今まで以上に異民族や異文化との接触・交流が多くなり、異民族や異文化との共存・協調が重要な課題となるであろう。21世紀に生きる人間として、民族の違いや文化の違いによって生じる諸問題をいかに解決し、異民族や異文化との共存について、生徒が自ら考え、課題を追究していくことができるよう本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は５時間構成の第４時限にあたる。第１時限では、人種とは何か、世界のおもな人種とその分布について学習する。第２時限では、民族とは何か、世界のおもな語族とその分布について学習する。第３時限では、世界のおもな宗教とその分布について学習する。第４時限では旧ユーゴスラヴィアの民族問題について学習する。第５時限ではキプロスとスリランカの民族問題について学習する。学習指導要領での関連分野は地理Ｂの「(3)　現代世界の諸課題の地理的考察」の「ク　民族、領土問題の地域性」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○旧ユーゴスラヴィアと新ユーゴスラヴィア ○旧ユーゴスラヴィアの複雑な民族構成	○旧ユーゴスラヴィアと新ユーゴスラヴィアを確認する。 ○旧ユーゴスラヴィアは６つの共和国、５つの民族、４つの言語、３つの宗教、２つの文字がある民族構成が複雑な１つの国家であったことを理解させる。	○ヨーロッパにおける旧ユーゴスラヴィアの位置を地図帳とプリントの地図で確認

展開	○ユーゴスラヴィアの国名の由来 ○複雑な民族構成	○ヨーロッパ人（ゲルマン民族、ラテン民族、スラブ民族）と南スラブ人の起源と移動について理解させる。 ○６つの共和国、５つの民族、４つの言語、３つの宗教、２つの文字を理解させる（６つの共和国、５つの民族、４つの言語、３つの宗教、２つの文字の関係をまとめたプリントを配布する）。 ○おもな５つの民族ごとに５つの共和国が構成されているが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国は複数の民族・宗教が混在していることを理解させる。 ○歴史的な民族対立や、連邦内での南北の経済格差などのために民族紛争が激化し、分離独立したことを理解させる。 ○分離独立した新しい国家においても、内戦がおこったことを理解させる（特にボスニアの内戦について）。 ○新ユーゴスラヴィアにおいてもコソヴォ自治州のアルバニア人問題など、まだ民族問題が解決していないことを理解させる。	○６つの共和国の位置をプリントの地図で確認 ○５つの民族の分布を地図で確認
まとめ	○多民族国家の課題	○ＮＡＴＯを中心として、平和・共存への努力がなされていることを理解させる。 ○民族問題の解決は容易なことではないが、これからの国際社会においては重要な課題であることを理解させる。	

(4) **評価の観点**　①世界の諸地域には深刻な民族問題・民族紛争がみられる地域もあることを理解できたか。②民族問題の解決は国際社会において重要な課題であることが理解できたか。③異民族・異文化を理解し、尊重することが大切であることを認識できたか。

(5) **指導上の留意点**　①世界の国々の中には複数の民族からなり、複数の言語が使われている国も多いことを理解させる。②世界の多くの地域で民族問題・民族紛争がみられることを理解させる。③多民族国家であっても特に問題のみられない国家もあれば、多くの問題を抱えている国家、さまざまな努力をしている国家も多いことを理解させる。

2　バルカン半島における民族対立

(1)　**教材として取り上げた理由**　米ソ冷戦構造が崩壊したのち、世界各地で民族自立を掲げた多くの民族紛争が勃発している。中でも最も複雑で過酷な状況をもたらしている紛争が「バルカンの民族紛争」である。バルカン半島における民族対立は、半島の地理的特殊性により多くの民族が半島内に流入したこと、ビザンツ帝国、オスマン帝国の支配に対する異文化の受容と反発、また、ハプスブルク帝国による支配など複雑な支配関係を歴史的観点から追求し、そこから派生した民族主義が現在のバルカン紛争の要因となっていることを学ぶ。この問題をとおし、民族の違い、文化の違いによる摩擦が戦争にまで発展すること、また異文化を受容し、国際協調、共存の考えが大切であることを理解させる。現代社会では異文化との接触は避けられない状況である。そのような国際状況の中、異文化との接触でどのような問題が派生し、それを解決しともに真の国際社会を築いていくためにはどうすればよいのかを考えていかなければならない。21世紀に生きる生徒が、国際社会に生きる人として、主体的に考え、行動できるよう本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　本時は4時間構成の第3・4時限目にあたる。第1・2時限目では、ロシアの南下政策とオスマン帝国の領土をめぐる「東方問題」を学ぶ。本時では、第一次世界大戦前のバルカン戦争から大戦後の国境線画定までをサライェヴォの街に焦点をあて、「ヨーロッパの火薬庫」から第一次世界大戦へ、その後の国家（ユーゴスラヴィア）の成立が強国の利害によって決定された歴史的背景を理解させる。さらに、第二次世界大戦後のティトーによる多民族国家の経営、冷戦構造崩壊後の民族対立の噴出、異民族共存の難しさやまたその必要性を理解させることを目的とする。最後に現在のユーゴスラヴィア紛争の概略を解説したうえで、インターネット・新聞を利用し過去の歴史ではなく同時代に起きている問題であること、その解決の難しさ、必要性を認識させていく予定である。学習指導要領での関連分野は「世界史A」の「(3)　現代の世界と日本」の「オ　地域紛争と国際社会」及び「世界史B」の「((5)　地球世界の形成」の「エ　国際対立と国際協調」である。また、「地理B」の「(3)　現代社会の諸課題の地理的考察」の「ク　民族領土問題の地域性」と関連して学んでいくことも有意義である。

(3)　**展開例**（2時間続きの指導案であるが、1時間ごとの授業も可能である。）

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○新ユーゴスラヴィアの概要 ○第一次大戦前の列強の政策	○新ユーゴの大統領選挙の結果や外務省のホームページをみて身近に感じる。 ○白地図に3C政策の拠点、3B政策の拠点を記し、また地図からロシアの「南下政策」のねらいを知り、バルカン半島の戦略的重要性を理解する。	パソコン 白地図 プリント 「現代世界」
	○民族主義、領土拡張政策	○オーストリアのボスニア併合、バルカン同盟の結成までの出来事を時系列に理解する。	

展開		○バルカン戦争について学び、特に第二次バルカン戦争はスラヴ民族同士の戦争だった事に着目する。	
	○サライェヴォ事件	○サライェヴォ事件およびその逸話を紹介し僅かなきっかけと偶然から、セルビアの一青年が放った銃弾が世界大戦に繋がったことを理解させる。	プリント
	○第一次大戦後の新国家誕生	○ヴェルサイユ体制のもとユーゴスラヴィアが、列国の利害のもとに誕生したことを知る。	
	○ナチス・ドイツによる民族分断政策	○第二次世界大戦時、ナチス・ドイツの政策により、民族分断が図られクロアチア人の極右組織「ウスタシャ」によるセルビア人虐殺があり民族対立が激化したことを知る。	
	○ティトーの民族共存政策	○ティトー大統領による「自主管理社会主義」の概略を説明し、危ういバランスの上にも民族共存の道が開かれつつあったことを理解する。	
	○連邦崩壊	○現在のバルカン諸国の地図を用い、経済不振や米ソ冷戦構造の終結後連邦が崩壊した事を理解する。	白地図
	○民族紛争	○92年ボスニア紛争の資料写真をホームページからダウンロードし、サライェヴォという街の悲劇および戦争と平和について考察させる。また、ユーゴスラヴィア関係のホームページを見て、民族紛争の解決が容易でないこと、逆に政治・国連のレベルで共存の道を探っていることなどを知る。	パソコン
まとめ	○「戦争と平和」「民族紛争」	○「サライェヴォ」「民族主義」「民族共存」のテーマで戦争と平和について自分なりの考えをまとめてみる。	

(4) **評価の観点**　評価は単に歴史的知識の習得のみに観点をおかず、過去の出来事から現在に学ぶことは何であるか考察することが大切である。パソコンや新聞・資料を多く使うことにより、生徒自身が考え多様な価値観を持つプロセスを大切にしたい。また、最後にレポートを課すことにより自らの考えをまとめる力を養うことも大切である。①大戦前の列強の政策が理解できたか。②民族主義が戦争に繋がることもあり得ることを理解できたか。③異民族・異文化を理解し尊重する態度が大切であることを認識できたか。

(5) **指導上の留意点**　①ホームページはあらかじめアドレスを提示し、見に行くまでに時間がかからないようにする。②生徒が視覚的に理解できるように地図・資料はわかりやすいものを用意する。③生徒が自ら考えることが出来るよう、考察する時間や発問に考慮する。④関連する他の科目、特に地理との連携に配慮し、「地理Ｂ」の「(3)　現代社会の諸課題の地理的考察」の「ク　民族領土問題の地域性」との関連に配慮する。

3　国際協力に見る異文化との共存

(1)　**教材として取り上げた理由**　　現在に至るまで様々な援助主体により国際協力が行なわれてきたが、その過程で多くの問題点が浮上し、その幾つかは解決され、また残りの幾つかは課題として残った。問題発生の根源的要因の一つとして、「非西欧的なものは遅れたもの、開発・改善されなければならないもの」とする考え方が、これまでの国際協力の主体者側にあったことがあげられる。先進国の技術や生産様式、またその背景となる考え方がそのままでは発展途上国に適合せず、問題を解決するどころかむしろ拡大する場合すら少なくなかった。今や、そうした考え方を払拭し、多様性を認め、尊重することが求められ始めている。援助が定着し、援助対象の自立を促すための条件は、援助をされる側の主体性を引き出すような「援助される者の立場に立って考えられたもの」であるということであり、それは地域性の理解の上にのみ成り立つ異文化の尊重と理解に他ならないのである。そして、この非西欧的なるものの中に、我々先進国が模索している「持続可能な進歩・発展・成長」の方策のヒントが隠されている可能性がある点でも、このことは大きな意味を持つ。

(2)　**本時のねらい**　　ここに示すのは9時間構成の第4～5時限と第8～9時限である。第1～3時限では、途上国の抱える諸問題とその構造、国際協力の主体として国際機関、ＯＤＡ、ＮＧＯそれぞれについての仕組みと実績及び問題点などを、第4時限以降のための基礎知識として紹介する。第4～5時限では、アジアにおいて食糧増産援助策として導入された先進国型農業がもたらした社会的変化の事例を通して、「地域性の尊重の重要性」について理解させる。第6～7時限では、バングラデシュにおける日本のＮＧＯの具体的活動例を通して、「異文化との共存」の鍵となる、「表面事象の背景や構造的要因の理解の必要性」について理解させる。第8～9時限では、シミュレーション教材を利用した参加型学習により、「異文化との共存」についての実践的考察を深める。なお、学習指導要領における関連分野は、「地理Ａ」の「(2)　地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」の「イ　地球的課題の地理的考察」の「ア　諸地域から見た地球的課題」や、「地理Ｂ」の「(3)　現代世界の諸課題の地理的考察」の「オ　環境、エネルギー問題の地域性」、「カ　人口、食料問題の地域性」及び「キ　居住、都市問題の地域性」などである。

(3－1)　展開例（第4～5時限）

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○アジアの絶対的貧困者数 ○稲魂信仰	○アジア各地の絶対的貧困者数の多さを日本の人口と対比させながら理解する。 ○ジャワ島のニ・ポハチ伝説とアニアニを知る。 ○緑の革命は、貧困層救済のため、食料不足解消の決定打として導入された経緯を理解する。 ○国及び地域を地図帳で確認する。	「アジア地域の貧困者数」 「ニ・ポハチ伝説概略」「アニアニの図」
	○在来種とＨ	○高収量品種(ＨＹＶ)開発の歴史とその特性につい	「米の在来種と高

展開	ＹＶの特性の比較 ○ＨＹＶ定着の条件 ○ＨＹＶの短所 ○ジャワ島におけるＨＹＶ導入による社会変化	て、在来種のそれと比較対照しながら理解する。在来種の特性が自然条件に合致し、それに応じて在来農法が確立された事を理解する。 ○ＨＹＶの定着には相当の経済力が必要であり、貧困層救済になり得なかった事を理解する。 ○ＨＹＶ導入によるコスト増加は収穫量増加を上回り、農業経営を圧迫したことを理解する。 ○ジャワ島において、人口急増とＨＹＶ導入がエンクロージャーを進め、貧困層を拡大させたことを、社会構造の観点から理解する。	収量種の比較」「トラクター導入による影響」「ＨＹＶ導入に必要な諸条件」「ＨＹＶ導入による生産費変化」「緑の革命に起因する社会問題」「ジャワの収穫制度の変遷」
まとめ	○地域性を重視した新品種 ○有機農法への転換事例 ○地域に合った農法	○ＨＹＶと在来種浮き稲との交配種ＩＲ422の成功例を通して、地域性の尊重の重要性を理解する。 ○フィリピンにおけるＮＧＯによる緑の革命から有機農法への転換の成功事例を通して、地域性の尊重の重要性を理解する。 ○途上国に導入するにはどのような農法がよいかを考える。	「化学肥料使用と地力維持の重要性」「病虫害の爆発的発生の要因」「在来品種・農法尊重の有効性」「有機農法の有効性」

(4—1) 評価の観点　①途上国地域の在来農法、社会構造、文化などは、先進国に対して決して遅れたものではなく、地域性との調和を持って必然的に形成されていることを理解できたか。②先進国技術による緑の革命が途上国の農村社会にもたらした功罪について理解できたか。③開発・成長、進歩・発展の理念を具現化する方法について、先進国のものが唯一絶対ではなく、文化が異なればその方法もまた異なることを認識し、21世紀の国際協力の在り方を考えることができたか。

(5—1) 指導上の留意点　①貧困の原因は人口急増ではなく、所得分配の不平等であることを押える。②取り上げた地域については地図帳などを用いて確認させる。③先進国の文化と途上国の文化のどちらが正しいのかというような二者択一的思考に陥らせず、文化は夫々の地域性に根ざしたものであり、必然性を備えていることを押える。

(3—2) 展開例（第８～９時限）

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○シミュレーションの説明	○シミュレーション教材「Ｙ国Ｚ村の農村開発援助プラン」について説明する。	
展開	○シミュレーションの開始	○状況設定、Ｙ国基礎データ、Ｚ村農村マップ、Ｙ国関係者資料を説明し、スライドによる地域紹介を行う。その後４つの開発援助プランを示す。	○ワークシート１～３ ○スライド

	○援助プランの検討 ○発表・再発表及び討論	○グループに分かれ、援助プランの検討を指示する。 ○決定したプランとその決定理由を発表させる。 ○プランの再検討を指示する。 ○再決定プランとその決定理由を再発表させる。 ○グループの発表が終了後、質疑応答と討論を行う。	
まとめ	○まとめ	○立場や考えの違いによって採択するプランが異なることを示し、誰のための援助か慎重に考えることが重要であることを説明する。その際、地域性の理解の上に立って相手先の文化を尊重することが大切であることを説明する。 ○この授業で学んだこと及び感想を記入させる。	○ワークシート4

(4−2) 評価の観点　①主体的に学び行動することができたか。②地域性の理解の上に立って、異文化を尊重・理解することが重要であることを認識できたか。③(4−1)の③に同じ。

(5−2) 指導上の留意点　①発展途上国の人々も日本人も同じ地球に生きる市民であることに気づかせるよう留意する。②国際社会における先進国日本の役割について発展的に考えられるよう留意する。③各グループの援助プランの検討が進まない場合、状況によっては検討が進むよう教師が適宜助言を行う。

◎資料 **「望ましい援助とは〜Ｙ国Ｚ村の農村開発援助プラン」ワークシート１〜４抜粋**

●１.「状況設定」　『あなた方は後発発展途上国であるＹ国に派遣された援助プラン評価専門家チームです。今Ｙ国ではＺ村の農村開発援助プランが４つ示されています。そこであなたは方は４つの援助プランから最適のものを１つを選択し、Ｙ国政府に助言して下さい。あなた方の仕事は責任重大です。それでは頑張ってＹ国に最適の援助プランを決定して下さい。』

●２.「Ｙ国概要及び基礎データ」　『Ｙ国は東南アジアの赤道直下に位置する後発発展途上国である。国土は山がちで、気候は主に熱帯雨林気候、宗教は上座部仏教である。主な産業は、在来種を在来農法で栽培する稲作を中心とした農業で、人口の約80％は農村に居住している。農民は大地主、自作農民、小作人、土地なし農民で構成されている。人口はこの30年間で急激に増加し、貧困層が増え貧富の差も拡大している。農村では土地なし農民が増え、貧しくて学校に行けない子どもの数も激増している。山間部には焼畑や狩猟を行って自給自足の生活を営む少数民族Ｗ族が暮らしている。援助対象地域のＺ村は平野と山地からなり大きなＸ川が流れている。山地には熱帯雨林とＷ族の居住地域がある。このＺ村は首都から遠く離れ、Ｙ国の中でも開発の遅れた貧しい地域である。なお今回のプランの予算上限額は10億円である。』

●３.「Ｙ国関係者からの聞き取り調査」

１．Ｙ国政府官僚　『この国は貧しいですが、人々は仕事熱心で大変よく働き、これから発展する可能性は高いと言えます。従って電力や道路や水道などを整備して工場を建設すれば、急速に発展していくと考えています。またこの国の豊かで美しい自然と歴史の古い寺院や伝統

文化を外国の人々に知ってもらうため、観光地化したいと思っています。従って外国の会社と資金を出し合って観光開発をしたいと思っています。』

4．Ｚ村土地なし農民　『私たちの生活といったらひどいものだ。食事は１日２回だね。当然私の家には電気なんていうものはない。病気になったときが一番つらいな。だけど子どもたちには、読み書きと計算ができるようになってもらいたい。私は字が読めなくて、農業から他の仕事に転職できないんだ。よい暮らしをしたいと思っても地主の土地は小作人たちが借りてしまって、私たちの借りられる農地はこの村には無いんだよ。だから農業労働者として地主や自作農民や小作人に雇ってもらうのだけれど、私と同じ土地なし農民が最近増えてな。農作業にありつく競争が激しくて、毎日は仕事がないんだ。また労賃も下がってきた。厳しい現実だよ。だけど子どもも働いてくれるし、毎日お寺で祈っているから、何とか生活していけるんだ。』

この他　2．Ｚ村大地主　3．Ｚ村小作人　5．Ｙ国実業家　6．少数民族Ｗ族

●4．「Ｚ村農村開発援助プラン」

1．農業用水路の建設、トラクターの輸入、化学肥料・農薬工場の建設費補助　『高収量品種導入のために、Ｘ川にポンプ場を建設しＺ村までの農業用水路を建設して水不足を解消する。そしてトラクターを10台輸入する。また化学肥料・農薬工場の建設費を補助する。工場が建設されれば、化学肥料や農薬が安くなるので、農民一人当たりの生産量は格段に高くなる。また建設関連の雇用及び工場労働者としての雇用が期待でき、Ｙ国の工業化にも結びつく。しかし村の一部には、収入が増えるのは地主だけという声や工場の公害を心配する声が聞かれる。なお電力供給は他の国の援助によって近々実現する見込みである。』

2．有機農法の協同生産組合設立　『小作人や土地なし農民を組織化して、水田を購入し有機農法の協同生産組合を設立して、無農薬有機肥料の農産物を生産する。養魚場の建設や鶏・豚の飼育を行い、糞は有機肥料にする。また組合で、貧しい人にも低利で融資できるよう融資制度を実施する。有機農法は人手がかかるので多くの農業労働者が必要となり、かなり多くの雇用が期待できる。しかし農民一人当たりの収入は低く、組合の生産物の売り込みも組合員で行わなければならない。また生産規模も簡単には大きくできない。』

3．外資との合弁による自然を生かした観光開発　『外国企業と資金を出し合ってホテルを建設し、異文化理解を目的とした伝統工芸や民族舞踊の体験ツアー、山間部Ｗ族の集落を訪れたり貴重な熱帯雨林の森を観察するネイチャーツアーを実施する。また歴史的寺院を観光地として整備する。雇用だけではなく、手工芸品の販売や農産物の販売も期待できるが、その規模はそれほど大きいものではない。観光客相手の伝統工芸体験や民族舞踊が単なる観光ショーと化し伝統の破壊と考える人々や祈りの場の寺院を観光地にすることに反対する人々がいる。』

4．大人のための識字教室・職業訓練の実施及び学校・診療所の建設　『生活レベルの向上には学問が不可欠である。大人向けの読み書きや簡単な計算を学ぶ夜間の識字教室を開催する。ミシンを輸入して、縫製技術を身につける職業訓練所をつくる。技術指導時以外は無料でミシンを利用できる。また学校と診療所を数カ所ずつ建設し、教材・学用品、医療機器・医薬品なども援助する。』

Ⅱ　日本の国際関係のあり方を考えるための視点

1　幕末日本をめぐる国際環境

(1)　**教材として取り上げた理由**　　幕末から明治維新にいたる時期は、二百数十年来の幕藩体制の崩壊のドラマが、めまぐるしく展開する時期である。また一方で、アジアの東端の島国日本が、パワー＝ポリティクスが支配する有機的な世界史の中に編入させられてゆくという画期もなしている。近年、この時期における英仏など欧米列強の影響については、「世界の中の日本」という視点からも、重視されてきている。しかし、教科書の記述などは断片的かつ表面的で、視野がせまい。そこで、近年の明治維新の国際的環境についての研究をふまえ、開国後の政局の展開を、国際的な背景と結びつけながら考察させることが必要である。つまり、朝廷や尊王攘夷の志士たちと公武合体の幕閣や諸侯との対決、幕府独裁か倒幕かをめぐる複雑な対抗やかけひきなどが、つねに外圧に対する国家的対応の方策いかんをめぐって展開しているという視点を持たせること。さらに、民衆の世直しの潮流もまた、列強の圧迫と為政者たちの政争激化の中で、ますます大きくなり、歴史を動かす原動力となったことに着目させる。このような中から、パワー＝ポリティクスの支配が進むであろう21世紀の世界の中で、国民としての自覚を持ち、日本の国際関係のあり方を自ら考え、判断する力を培うことをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は3時間構成の第3時限に当たる。第1時限では、開国後の政局の転換について、第2時限では、尊王攘夷運動の展開を概観する。その際、第1時限では、ロシアの対馬占拠事件をとりあげ、植民地化の危機を感じとらせ、かつ民衆の抵抗がこの事件を解決する大きな力となったことを理解させる。第2時限では、イギリスの砲艦外交の意図を「オールコックの覚書」やアーネスト＝サトウの「英国策論」などを通じて理解させる。また英仏の横浜軍事基地建設についても注目させる。本時では、イギリス外交の変化による倒幕勢力の形成のようす、そしてフランス外交の幕府への影響ならびにその意図を理解させる。そして日本が独立を保ち得た理由を考察させ、さらに、そのような環境の中で主体的に行動した日本人の姿を通して、今日の国際社会の中でいかに行動してゆくべきかを考察させる。学習指導要領の関連分野は、「日本史B」の「(5)　近代日本の形成とアジア」の「ア　明治維新と立憲体制の成立」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○イギリスの対日政策 ○長州藩の藩論転回	○前時のイギリスの対日政策を確認する。 ○下関戦争で攘夷の不可能を悟ったのみならず、植民地化の危機感を持ち、貿易による富国強兵を目指した、高杉晋作らの蜂起・改革運動を理解する。	◎ワークシート① ◎ワークシート② ・史料「遊清五録」（高杉晋作）

展開	○長州再征と薩長連合の形成	○外圧を機に藩論を転回した薩長両藩が倒幕という共通の目標にむかうことを確認する。 ○長州再征宣言により窮地に陥った長州藩を援助することで、薩摩藩との盟約を導いた坂本龍馬の努力・意図を理解する。（イギリスの役割にも留意する） ○強行された幕長戦争は米価高騰にともなう「打ちこわし」「世直し一揆」を頻発させ、ついに中止に至ったことを理解する。	・グラフ「大坂における物価指数」「幕末の百姓一揆」
	○フランスの幕府支援と慶喜の巻き返し	○公使ロッシュ着任以来の幕府支援策を振り返り、彼の意図を考える。 ○親仏派（小栗忠順ら）が幕政の主導権を握り、徳川絶対主義を目指したこと、またそれに対する勝海舟の批判の意図を理解する。	・資料「幕末日本とフランス外交」 ・史料「海舟日記」「開国起原」（勝海舟）
	○大政奉還と王政復古のクーデター	○倒幕勢力内の挙兵討幕路線（薩長）と公議政体路線（土佐）のそれぞれの意図を理解する。 ○幕府勢力温存をはかった慶喜の選択の意図を理解する。	・史料「議題草案」（西周助）
まとめ	○日本が独立を保ち得た理由	○英仏の対日政策を振り返り、それに対して日本人はどのように対応したかもう一度、概観する。 ○なぜ日本は独立を保ち得たのか考える。	◎ワークシート③

(4) **評価の観点**　①列強の外圧をうけ、それと衝突・妥協・利用しながら、独立を保ち、明治維新を実現させた当時の日本人の行動を理解できたか。②民衆の主体的な行動及び変革を求めるパワーが歴史を動かす力となったことを理解できたか。③それらを通して、今日の国際社会の中で日本人として生きてゆく上で重要なことについて考えることができたか。

(5) **指導上の留意点**　①資料を活用しやすいようにワークシートを工夫する。②資料・統計を読みとり、生徒自らが考え判断して歴史を再構築してゆけるよう、適切な助言を与える。

2　日本による植民地支配下の朝鮮

(1)　**教材として取り上げた理由**　　韓国（大韓民国）の日本文化解禁政策、ワールドカップの日韓共催などに見られるように、日韓関係の新しい時代が始まった。また、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国、日本と朝鮮民主主義人民共和国の関係においても新しい展開が期待されている。日本と大韓民国、日本と朝鮮民主主義人民共和国が友好関係を深めていくためには、相互が客観的な歴史事実をふまえ、誤解や偏見をなくし、現在の課題を解決していくことが大切である。そのような観点から、日本による植民地支配下の朝鮮について、生徒が主体的に学ぶ2時間構成の授業を構想した。生徒が能動的に知識や概念を獲得する授業、生徒が新たな探求心や問題意識を持てる授業とするために、授業時間を多く確保して、資料や授業展開を工夫し、ワークシート作業や判断・思考・意見表明の場面を設けた。展開例として示す、土地調査事業と興南工業地帯の実態は、日本による植民地支配下の朝鮮の状況として具体的であり、生徒の学習意欲を引き出す要素を多く含むものであると考え、教材化した。

(2)　**本時のねらい**　　本時は2時間構成の第1時限にあたる。本時では土地調査事業を取り上げ、それを糸口に、韓国併合までの経過とその後の植民地政策について理解させ、日本の植民地下におかれた朝鮮の状況について具体的に考えさせる。第2時限では朝鮮の多くの人々は独立を願いながらも（三・一独立運動）、皇民化政策（日本語使用・神社参拝の強制、創氏改名など）に組み込まれていくことを学習する。学習指導要領の関連分野は、「世界史B」の「(5)　地球世界の形成」の「ア　二つの大戦と世界」、または「世界史A」の「(3)　現代の世界と日本」の「イ　二つの世界大戦と平和」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○朝鮮を植民地にしていた日本	○日本の企業が朝鮮に作った興南工業地帯についての資料を見てワークシート作業を行わせ、日本が朝鮮を植民地としていたことを確認する。	資料「日本窒素肥料朝鮮事業絵図」
展開	○日本の植民地政策の概要 ○土地調査事業の「申告書」 ○土地調査事業の実態	○教科書で日韓併合後の日本の植民地政策の概要について調べさせる（ワークシート作業）。 ○土地調査事業の「申告書」の書式を紹介する。 ○土地調査事業についての韓国・歴史教科書の記述を紹介し、申告により所有権が明らかにならない土地は朝鮮総督府の所有にされたことを確認する。	資料「土地調査事業の『申告書』」 資料「韓国の教科書に書かれた土地調査事業の実態」

	○日韓併合までの経過と朝鮮の人々の抵抗	①「故意に申告をしないものも多かった」という韓国教科書記述について、なぜ「申告書」を提出しないのか、本当にそんな人がいたのかどうかを問題提起する。 ②上記の問題について自分の意見を形成する１つの材料として、韓国併合までの経過と朝鮮の人々の抵抗について資料を見て調べさせる（ワークシート作業）。 ③自分が当時の朝鮮の農民だったら『申告書』を提出するかどうか考えさせる。 (a)２、３人の生徒に自分の判断とその理由を発言させる。 (b)その他、疑問に思ったことを出させる。	資料「韓国併合までの略年表」 資料「義兵闘争の回数」 ＊判断する過程で当時の具体的状況に目を向け、様々なことに気づき、疑問を持つことを目的とする。
まとめ	○日本の植民地政策と朝鮮	○他人の意見や疑問も参考にしながら、土地調査事業を中心とする日本の植民地政策と朝鮮について、自分の意見・感想・疑問（以下３項目）を用紙に記入させ提出させる。 (a)自分が当時の朝鮮の農民だったら『申告書』を出すか、出さないか（判断とその理由） (b)日本の植民地政策と朝鮮についての意見・感想 (c)疑問に思ったこと、知りたくなったこと	提出用紙 ＊提出された意見等は「世界史通信」としてまとめ、後日、生徒に配付する。

(4) **評価の観点**　①韓国併合までの経過と日本の植民地政策の概要を理解できたか。②朝鮮総督府による植民地政策の１つの具体例としての土地調査事業の実態を理解できたか。③土地調査事業を中心とする日本の植民地政策と朝鮮について、しっかり考えることにより、知りたいことや疑問を持つことができたか。④日本の植民地政策と朝鮮について、自分の意見を形成できたか。

(5) **指導上の留意点**　①日本の植民地政策の評価について様々な意見があることもふまえ、教師が生徒に示す内容は具体的事実にとどめる。②判断や思考の過程で、知識を活用すること、様々なことに気づくこと、様々な疑問を持つことを重視する。③韓国の教科書も含め、教科書の記述については、具体的事実の記述部分と解釈をふくむ記述部分があることを指導する。④提出された意見等は、後日、「世界史通信」として生徒に配付し学びあいを深める。状況によってはさらに紙上討論を組織する。⑤なお、生徒から疑問や意見等が多く引き出せるよう発問や雰囲気作りに留意する。

3　20世紀初頭の国際関係と十五年戦争の始まり

(1)　**教材として取り上げた理由**　　最近の日本史100年間を振り返って最大の惨禍をあげるとすれば、満州事変から太平洋戦争敗戦までの十五年戦争ではないだろうか。航空機による空からの爆撃だけでも日本側の死者約25万６千人、焼失家屋約221万戸、罹災者約920万人にものぼった。また、広島・長崎においては先の死者のほか、原爆によって約19万人もの命が失われた。さらに、沖縄では住民を巻き込んだ戦いが行われ戦死者は約18万８千人にものぼる。死んでいった人々にはそれぞれの家族がいたであろうし、家や財産、職場や仕事を失った者などは計り知れない。今日の豊かな日本で育った者には、戦中戦後の人々の暮らしは想像もつかない悲惨さを含んでいる。この20世紀の日本人の体験は、生徒達に考えさせたいと思い教材として選択した。

(2)　**本時のねらい**　　本時は４時間構成の第３時限目に当たる。毎時間の導入として、パソコンを活用したクイズ形式の問題演習を通してこの時代を考察することに必要な知識を学習させる。展開例として第１時限目は玉音放送から始まるＶＴＲや写真などの視聴覚教材を使用し第二次世界大戦、とくに太平洋戦争や当時の国民生活の様子を中心に提示する。また、今世紀初頭の外交関係を鳥瞰させるために、あらかじめ作成した年表を中心としたチャート図等を、教科書や資料集を使って２～４名構成のグループで完成させる作業学習を行う。第２時限目にヴェルサイユ体制と日本の国際的地位、第３時限目にワシントン会議から日独伊三国同盟までを、とくに日本を取り巻く国際情勢と国内事情を中心に考察する。とくに日本の対中国政策が欧米列強と対立していたことを理解させる。さらに満州事変後の日本の外交方針と政策が、アジアに利権の持つ国々と摩擦を増幅させたことを考察させる。４時限目には日米開戦と日本の敗戦までを扱う。学習指導要領の関連分野は、「日本史Ｂ」の「(6)両世界大戦期の日本と世界」の「ウ　第二次世界大戦と日本」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○今世紀初頭の日本と世界	○パソコンを使ったクイズ形式の問題演習。 （年号、史実、人物等の知識を深める） ○1900年代初頭の東アジアにおける日本、欧米列強の勢力図を提示説明。	○２～３人で１台のパソコンを利用 ○大型プロジェクターの活用
展開	○ワシントン会議前の日本と世界	○ワシントン会議にのぞむ日本の方針や立場を、平和主義の観点から論じた、大正10年７月23日の雑誌社説から当時の日本と世界の情勢を探る。	○石橋湛山『東洋経済新報』社説

展開	○日本の対中国方針と政策	○第１次若槻内閣の辞職から、対中国外交政策の流れと変化を理解し、なぜ日本が大陸進出を目指し、満州を重要な地域と見なしたのかを探る。	○東方会議『対支政策綱領第６項』
	○中国大陸の情勢と関東軍	○列車の通過を妨げなかったほどの爆破が、なぜ昭和20年までの戦争へ拡大したのかを考察する。 ・中国の政治的分裂 → 柳条湖事件 → 日本政府の不拡大方針 → 承認と国内世論 → リットン調査団へと展開。	○石原莞爾『満蒙問題私見』 ○『満州事変機密作戦日記』
	○満州国と国際連盟の脱退	○なぜ満州国放棄より国際連盟脱退を選択したのかを探る。	○リットン報告書
	○その後の外交政策	○「満州は日本の生命線であると」いう日本の意見に対してリットンが反論する根拠とし、後に東京裁判の根拠にもなった国際条約とは、どのようなものだったのかを理解する。	○国際連盟規約第11条、九カ国条約、パリ不戦条約
	○宣戦布告なき戦争と南進政策	○国際連盟脱退後の日本はどう動いたのか。それに対する国際情勢を探る。 ○日中戦争と南進政策を通して、日本と諸外国の対立を探る。	○『五相会議決定対支方策』
まとめ	○国際的孤立回避の外交	○日本は、ドイツやイタリアと同盟を結び枢軸陣営を形成し、自由主義陣営・共産主義国のソ連と世界が３勢力に分割されたことを理解する。	

(4) **評価の観点**　①太平洋戦争への道のりを、今世紀前半における東アジアをめぐる国際情勢と日本の外交政策、及び国内事情の関係から見つめ直せたか。②なぜ日本は世界の国々と戦争関係に陥ってしまったのかを自分なりに考えを持つことができたか。

(5) **指導上の留意点**　①事前に実施した、戦争に関する生徒アンケートを十分に活用するとともに、生徒が公正に判断ができるようにつとめる。②知識の定着と考察の向上を図るためにパソコンを利用した問題演習をグループでさせる。③各学習項目において適度な設問を重視し、生徒の発言を促し主体的考察と授業参加を喚起する。

4　サンフランシスコ平和条約の成立

(1)　**教材として取り上げた理由**　今日国際社会ではさまざまな問題を抱えているが高度成長・安定成長をへて経済大国となった日本がその中でどのような役割を果たしていくか、世界から注目されている。戦後の日本の再出発はサンフランシスコ平和条約であった。1945年から1952年にわたる約7年間のＧＨＱによる日本の“非軍事化・民主化”をはかった占領政策下では徹底的に日本経済は抑えられた。しかし占領政策が転換され、“経済自立・再軍備”へとむかった条約締結を実現させたのは、国際環境の変化とそれへの対応であった。すなわち米ソ冷戦の進行が米国の占領政策を転換させ、全面講和か単独講和か揺れる中後者が選択され独立をし、さまざまな問題を抱えてながらも経済大国へ歩み始めたことを、史料を用いて考察させ今日の日本の出発点を知り、いつの時代でも国際環境をもとに政策が行われることを確認させることを目的とする。

(2)　**本時のねらい**　本時は2時間構成の2時限にあたる。第1時限では占領政策と諸改革についての内容を取り上げる。特にＧＨＱの五大改革指令の内容、国民生活の圧迫の様子を確認させる。第2時限では米ソ冷戦の進行、占領政策の転換による日本の独立、サンフランシスコ平和条約締結にまつわる2つの講和論、条約の内容と現代につながる問題点を取り上げる。学習指導要領では「日本史A」の「(4)　第2次世界大戦後の日本と世界」の「ア　戦後政治の動向と国際社会」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○占領期の日本	○占領期の日本はどんな状況であったか、前回の授業を思い出し、ＧＨＱの対日初期政策を復習する。またこの時期極度に圧迫されていた国民生活の様子も再確認する。	
展開	○米ソ冷戦の進行	○戦後の世界の国々の情勢を地図で確認し、米ソ冷戦の進行を年表事項・参考資料で確認する。	参考資料は「チャーチル前首相フルトン演説」、「中ソ友好同盟相互援助条約」
	○アメリカの対日占領政策の転換	○終戦後共産主義陣営が勢力を拡大し、米国が極東における共産主義の防壁として日本に期待していたこと、米ソ冷戦の進行という国際環境の変化によって日本の位置づけが変わったこと、そのため米国が日本を“非軍事化・民主化”路線から“独立・経済自立”路線にいかに切り替えたかを年表事項・参考資料をもとに考察する。	参考資料は「ロイヤル陸軍長官の演説」

	○単独講和と全面講和	○当時講和形式をめぐって全面講和論と単独講和論があったが、後者が選択された理由を参考資料を読みながら考える。東大総長南原繁が知識人の立場から永世中立・非軍事化を提唱し、吉田内閣は現実的に当時の国際環境では冷戦終結後共産陣営を含めた全面講和を待つことは難しく、とりあえず資本主義陣営と講和を結んでいく以外、方法はないという考えを持っていたことを理解する。	参考資料は『世界』、「吉田首相の国会発言」(『毎日新聞』)「世論調査結果」(『朝日新聞』『毎日新聞』)
	○講和条約の内容と問題点	○条文を読み、連合国との戦争状態が終結したことを理解する。また、条約締結国との間の国家としての補償問題は解決していったが、アジア諸国の人々から個人としての補償を求める声があがってきていることを理解する。 ○千島列島の帰属をめぐる認識の違いから、旧ソ連との間に領土問題が生じていることを理解する。 ○同日結ばれた日米安全保障条約によって米軍が日本に駐屯するようになり、基地問題が生じていることを理解する。	参考資料は「サンフランシスコ平和条約」
まとめ	○まとめ	○いつの時代でも一国だけで政策は行えず、国際環境に左右されるということ、その中で状況を見極め判断しなければならないことを理解する。また一つの政策が様々な意味で後世に影響を与えることも理解する。	

(4) **評価の観点** ①史料を読解し、当時米ソ冷戦が進行したためアメリカの対日政策が転換したことを読み取れたか。②講和条約締結における2つの考え方を理解できたか ③講和条約締結の影響、その後の日本の社会の変化が理解できたか。

(5) **指導上の留意点** ①史料の精選に努め、生徒が理解しやすいように工夫する。②両講和論については簡潔、客観的に説明する。

Ⅲ　アジアをめぐる文化交流と交易

1　中国仏教僧のインド旅行と東アジアにおける仏教圏の形成

(1)　**教材として取り上げた理由**　　仏教は紀元1世紀頃、シルクロードの彼方からキャラバンと共に中国へ伝来したと言われている。中国の支配者たちは国家の安定の拠り所を仏教に託し、その求めに応じて西域の多くの僧たちが中国へやってきた。西域僧の布教と漢語訳の仏典を通して、人々は仏教を理解し、それと共に仏教は中国に根付くことになる。しかし、信仰の深まりと共に、インドに赴いて、より深く仏法を知りたいという中国僧も続出した。5世紀の法顕や7世紀の玄奘・義浄は多くの国々を訪れて、それぞれの地域の人々と親しく交わり、文化交流を果たすと共に経典を持ち帰り、漢訳をした。そして、それらの漢訳経典に基づいた仏教文化が華開き、東アジアへ伝播したのである。

これからはますます地球規模で物事を考え、行動しなければならない時代となった。そのためには国や民族の枠を超えて交流し、異文化をお互いが十分理解しあえる関係を築く必要がある。また、新しい時代にふさわしい文化を形成しなければならない。そこで中国仏教僧のインド旅行とその後の仏教文化という点から、国際交流とそれによる文化形成を学習し、国際社会に生きる人間としての自覚を育成することをねらいとして、この教材をとりあげた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は「東アジア・内陸アジア世界の形成」の8時限目にあたる。第1時限目は東アジア・内陸アジアの風土、第2時限目は中華文明の起源、第3・4時限目は秦・漢帝国、第5時限目は遊牧国家の動向、第6・7・8時限目は唐帝国と東アジア諸民族の活動をとりあげる。本時では玄奘の旅行記などを資料として、旅の様子や帰国後の経典の漢訳化したことを知り、東アジア文化の特色である漢訳仏教圏の形成を考察させる。学習指導要領での関連分野は「世界史A」の「(1)　諸地域世界と交流圏」の「ア　東アジア世界」、「世界史B」の「(2)　諸地域世界の形成」の「ウ　東アジア・内陸アジア世界の形成」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○玄奘と「西遊記」	○「西遊記」の絵を見て、三蔵法師は実在の人物で、本やドラマなどの「西遊記」のモデルになったことを確認する。 ○玄奘はインドに経典を求め、仏教を学ぶために旅をしたことを確認する。 ○玄奘以外にも、中国人でインドに取経の旅に出た僧が百人以上いたことを理解する。	ワークシート ○挿し絵 「西遊記」

展開	○旅の行程	○法顕・玄奘・義浄のルートを地図上で確認する。 ○ルートに関連する地形を記入し、旅行の困難さを考える。 ○トルファン、カシュガル、ガンダーラなどの写真を見て、旅先の雰囲気をつかむ。	ワークシート ○東アジア大地図 ○写真
	○旅行の様子	○玄奘の旅行は高昌国王や西突厥国王などの援助によっても助けられたことを考察する。 ○玄奘と義浄はナーランダー寺院で研究生活をしたことを学習する。 ○ハルシャ王の開いた大法論大会で玄奘はインド僧と学術交流したことを学習する。	○資料 「大慈恩寺三蔵法師伝」
	○帰国後の経典の翻訳	○帰国後、求法僧は持ち帰った経典の翻訳に従事し、中国人はますます漢訳経典から仏教に入ることになり、仏教が中国に普及したことを学習する。 ○玄奘著「大唐西域記」は当時知られていなかった西域・インドの地理・風俗・宗教などが記されていたことを学習する。	○資料 「玄奘帰唐図」 「般若心経」 「大唐西域記」
まとめ	○朝鮮・日本など漢訳仏教圏の形成	○新羅は仏教を国教とし、すぐれた仏教建築や美術が生まれ、高麗の時代には「高麗大蔵経」を完成させたことを学習する。 ○日本は遣唐使を派遣し、唐にならって律令国家の建設をすすめ、仏教を盛んにしたことを学習する。	ワークシート ○中国・朝鮮・日本の年表 ○パネル 「仏国寺」 「高麗大蔵経」 「薬師寺」 「東大寺」

(4) **評価の観点**　①中国仏教僧の旅行の困難さと同時に多くの人の援助によって助けられたことを理解できたか。②玄奘などの漢訳した経典が朝鮮・日本に伝わり、東アジア世界の特徴である漢訳仏教圏を形成したことが理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①ワークシートに図や写真、地図、資料をのせ、興味・関心を育て、わかりやすいものに工夫する。②難解な資料については、生徒が理解しやすいように意訳する。③中国仏教僧の訳した漢訳経典に基づく仏教文化が朝鮮や日本に伝播し、東アジア文化を形成したことを注目させる。

2　『世界の記述（東方見聞録）』から探るモンゴル帝国における東西交流

(1)　**教材として取り上げた理由**　　モンゴル帝国の成立により、13～14世紀のユーラシア大陸の大部分には、政治的秩序がもたらされ、経済・文化両面で東西交流が盛んになった。モンゴル帝国は、広大な領土に駅伝制を設けて、内陸の交通路を整備し、通商に力を注いだ。同じ頃、十字軍を契機にめざましい経済発展を遂げたイタリア諸都市の商人は、東方の産物を求めて、モンゴル帝国の商業路に足を踏み入れることになる。ヴェネチア出身のマルコ＝ポーロは、父や叔父とともに、中央アジア経由で元を訪れ、フビライ＝ハンに仕えた。マルコ＝ポーロは、モンゴル人の補佐役として支配層を形成した色目人の政策スタッフとして活躍し、元朝における色目人重用の具体例として、モンゴル帝国の世界帝国的性格を象徴している。マルコ＝ポーロが、口述した『世界の記述（東方見聞録）』は、途中の陸海路の見聞やフビライ治世の出来事のみならず、ジパングなどの伝聞も含んでいる。そして泉州や杭州などの都市の繁栄が当時の世界最高水準だったことも紹介している。『世界の記述』の中の文章を紹介することにより、モンゴル帝国における東西交流の様子を理解させたい。また、最近話題になったマルコ＝ポーロは、実は中国に行っていないという説とそれに対する従来からの説明を提示し、生徒に考えさせる。「モンゴルの平和」によるユーラシア循環交易路の発展とユーラシアの一体化、及び元の大都を中心とした東西交流を理解させるため、『世界の記述』を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は、3時間構成の第3時限目にあたる。第1時限目では遼・金の中国支配、第2限目ではモンゴル帝国の出現と元の中国支配を学習する。本時では、『世界の記述』を用い、モンゴル帝国の出現という時代背景の中での東西交流の発展を考察させる。学習指導要領での関連分野は、世界史Aの「(1)　諸地域世界と交流圏」の「オ．ユーラシアの交流圏」、または世界史Bの「(3)　諸地域世界の交流と再編」の「ウ．内陸アジアの動向と諸地域世界」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○マルコ＝ポーロの紹介	○マルコ＝ポーロは黄金の国ジパングを西欧に初めて紹介し、ヴェネチアから中国、インドまで旅した旅行家として有名なことを説明する。	○マルコ＝ポーロの肖像画とコイン
	○マルコ＝ポーロの旅の行程	○マルコ＝ポーロの旅の行程をモンゴル帝国の領域とともに、確認させる。	○地図「モンゴル帝国の地図とマルコ＝ポーロの行路」
	○モンゴル帝国の発展とマルコ＝ポーロの一生	○マルコ＝ポーロの人生と略歴を知る。特に父と叔父が東方貿易に従事した商人だったこと、フビライ＝ハンに色目人として重用されたこと、ハンの使節として中国各地を歴訪したこと、帰国後自らの体験を	○資料「略年譜」 ○ＶＴＲ：映画『マルコ＝ポーロ』

		口述したことなどを年譜やＶＴＲから確認させる。	
展	○元の中国統治の説明と、モンゴル帝国で活躍した西方世界の人々の紹介	○元がモンゴル人第一主義をとり、モンゴル人と色目人が支配構造を形成し、マルコ＝ポーロをはじめ多くの色目人が元朝において重用されたことを説明する。そして、東西交通網の発達に伴い、多くの西方世界の人々が多様な目的でモンゴル帝国を訪れたことを紹介する。	○ワークシート ・元の支配構造 ・プラノ＝カルピニ、ルブルック、イブン＝バットゥータ等の略歴
	○『世界の記述（東方見聞録）』の紹介	○マルコ＝ポーロ著『世界の記述』の中のいくつかの紀行文を当時の挿し絵や写真付きで紹介し、生徒に様々な事実を読みとらせる。	○ワークシート 『世界の記述』と14世紀写本の挿し絵 写真「交鈔」
	○マルコ＝ポーロは中国に行っていないという説の紹介	○マルコ＝ポーロは、中国に行っていないという説があることを説明し、その理由を提示する。それに対する従来からの説明も提示し、生徒に考えさせる。	○ワークシート Ｆ．ウッド著『マルコ＝ポーロは本当に中国に行ったのか』
開	○モンゴル帝国による「世界交易システム」の形成と文化交流	○モンゴル帝国による「世界交易システム」が形成されたこと、そしてマルコ＝ポーロに代表されるイタリア商人も東方貿易に進出したことを地図で説明する。	○ワークシート 「ユーラシア大陸循環交易路図」
		○モンゴルの征服は、多くの文化圏との接触を促し、マルコ＝ポーロもローマ教皇とフビライの仲介をし、西方に火薬・羅針盤等が伝わったことを説明する。	○ワークシート
まとめ	○マルコ＝ポーロの旅と後世の影響	○モンゴル帝国の成立による東西交流の活発化という時代背景とマルコ＝ポーロの旅について、後の大航海時代への影響をふまえて説明する。	

(4) **評価の観点**　①モンゴル帝国の成立により、東西の貿易や文化の交流が飛躍的に発展したことを理解したか。②元においては、モンゴル人と色目人（西方の人々）が支配構造を形成し、マルコ＝ポーロをはじめとする多くの色目人が重用されたことを理解したか。③多少のフィクション性を持つ『世界の記述』を検証していくことにより、様々な事実が導き出されることを理解したか。

(5) **指導上の留意点**　①生徒の学習意欲を高め、モンゴル帝国時代の東西交流についての理解を深めるような資料を用意する。②資料を活用しやすいように、図や写真を使用する。③紀行文からの文章の引用の際には、適切な選択を行うよう留意する。④生徒に考えさせるワークシートでは、資料を整理して提示し、理解しやすいようにする。

3　「陶磁器から見た世界商業の進展」

(1)　**教材として取り上げた理由**　　英語でchinaと呼ばれるように、磁器は中国で発明され、主原料や製造方法などの点で、かつて他地域では生産が難しい商品であった。各地に残された陶磁器から陶磁器の生産や交易の実態を知ることができ、さらに、中国磁器そっくりに作られたヨーロッパの陶磁器や西アジアや日本・ヨーロッパの影響を受けた中国磁器から、東西の文化交流を理解できる。陶磁器を一つの例として、世界商業の進展と17・18世紀のアジアをめぐる交易と文化交流の歴史を理解させることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は2時間連続の「演習世界史」3回（6時間）における第5時限目にあたる。第1・2時限目に明・清・李氏朝鮮・日本と、オスマンなどイスラム帝国の動向を、第3・4時限目にオランダの盛衰、イギリス革命、三十年戦争、ブルボン朝と普・墺の動向、ロシアの発展を学ぶ。本時は陶磁器や茶を例としてアジア交易へのヨーロッパ人の参入と17・18世紀の東西文化交流を学び、第6時限目には砂糖・綿花・コーヒー・奴隷などの取り引きを中心にした大西洋貿易の展開と英仏植民地争奪戦争について学ぶ。学習指導要領での関連分野は「世界史A」の「(2)一体化する世界」の「イ　アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	○磁器の特徴、英語のchinaという言葉の由来	○市販の磁器を手に取り、土器・陶器と比べ、原料と焼成温度・製造技術が違うことを理解する。かつての中国の特産品として、磁器が英語でchinaとよばれることを知る。	素焼きの植木鉢・陶器の鉢・有田焼の壺・英和辞書・ＶＴＲ「日曜美術館」
展開	○アジアの磁器交易とイスラム世界	○中国磁器はアジア各地に運ばれ、イスラム世界にも多く伝わったことを復習する。	「トプカプ宮の中国青花」
	○17世紀のアジアにおける交易とヨーロッパ人の参入	○当時の世界商業におけるアジア産の主な商品は香辛料、絹などであったことを確認する。17世紀初頭オランダは東インド会社を設立し、中国の生糸や絹織物・陶磁器、東南アジアの香辛料などを輸入してヨーロッパ各国に販売すると共に中国産の生糸と日本銀との交易でも利益をあげたことを理解する。	ＶＴＲ「世界陶芸紀行」 資料「東インドからの輸入品」 年表
	○日本の磁器生産の開始	○秀吉の朝鮮出兵以後、朝鮮人陶工により有田で日本の磁器生産が始まったことを理解する。	資料「オランダ東インド会社名入り有田の染付」 地図

	○ヨーロッパの磁器生産	○18世紀初頭ヨーロッパで中国磁器などを模倣して磁器生産が始まったことを知る。 ○当時の人々がどのような食器を使用していたかを知る	ＶＴＲ「世界陶芸紀行」「マイセン」 資料
	○ヨーロッパとアジアの文化交流	○ヨーロッパとアジアの文化交流を示すものとしては暦法・時計・地理や科挙・農本思想・庭園・漆器・扇子などがあることを知る。日本の「鎖国」や中国の「海禁」はヨーロッパとの交流が体制の動揺には至らぬようにした政策であることを確認する。	資料「ヨーロッパとアジアの文化交流」
	○18世紀英国の喫茶の習慣の広まり	○18世紀英国で、喫茶の習慣が広まるようになったこと、茶の対価として中国に大量の銀が流入したことを知る。	資料「広東における茶の取り引き」
まとめ	○世界商業の進展	○ 17・18世紀のアジアとヨーロッパとの交流を知ると共に、アメリカやアフリカとヨーロッパとの交易と文化交流や世界商業の進展を示す例として何があるかなどを考える。	資料「中国からイギリスへの茶の輸出額」

(4) **評価の観点**　①17・18世紀のアジアとヨーロッパとの交易において、陶磁器が商品の一つであり、世界各地の陶磁器生産も東西文化の交流の一例であることを理解できたか。②生糸・香辛料・茶などが当時の世界商業における重要な商品であることを理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①絹や茶・陶磁器などの商品の対価としての銀の中国への流入に着目させる。さらに、ヨーロッパにおける茶の消費拡大に伴う中国への銀の流入が、その後のアジアとヨーロッパとの貿易構造の変化につながることに触れる。②図版・ＶＴＲ・教材提示装置などを活用し、より具体的に理解できるようにする。

まとめ

今回の研究は、「生徒の主体的な学習」の研究・実践を目指し、常に「主体的に学ぶとはどういうことか」という問いを念頭に、互いの意見をぶつけ合いながら、指導案を作成してきた。その中から「生徒に主体的に学習させる」ということは、単に作業的・体験的な学習を導入することであるという限定的なとらえ方をするのではなく、もっと多様な指導の工夫が可能なのではないかという共通の認識に到った。そこでまず、シミュレーション教材を利用した取組では、生徒同士の討論・発表を通して、生徒が問題意識を持ち、自ら探求してゆこうとする姿勢を引き出した。また、パソコンや視聴覚教材を利用することにより、生徒の興味・関心を引きつけるとともに、探究させる材料を与えようとした取組を行った。さらに、プリント（ワークシート）の工夫による生徒の能動的な活動や資料等の提示方法の工夫から、主体的な探求を導き出す取組などを行ったが、いずれも何らかの場面において「生徒の主体的な学習」を引き出すことにができた。

しかし、我々の研究主題にも掲げたように、主体的に「学ぶ」だけでなく、「行動する（できる）」ことが今、地理歴史科に求められている課題である。その点から考えてみると、必ずしも各々の取組が充分であったとは言えない。例えば、「国際協力」についてその重要性を理解するというだけでなく、もう一歩すすんで積極的に参加してゆこうという生徒の意識を高めるための工夫が必要であった。また歴史では、歴史的な見方・考え方をもとに今、どのように行動できるか（すべきか）を具体的に考察（決意）させるための工夫が大切であった。今回の研究で得た、これらの課題を踏まえ、今後も「主体的に学び行動できる」ような指導の工夫を追究し、継続的な検証をしてゆきたい。

研究主題　現代社会の諸問題に対し、主体的に考え、自ら課題を把握し、判断し、解決していく資質や態度を育成する指導の工夫

Ⅰ　主題設定の理由と研究の経過

1　主題設定の理由

科学技術の発展は、生産や流通から消費生活のありようまでを変え、私たちに物質面での充足をもたらしたはずである。たとえば、情報通信技術の発達により実現した、ファックスや携帯電話、パーソナルコンピュータの飛躍的な普及は、私たちの社会生活に大きな利便を与えた。この情報化の進展はまだ過渡期の段階であり、公共部門では次代の社会目標とも見なされつつある。しかし、このことが、本来は社会の現実のなかで見聞きし、あるいは触れたり言葉を交わしたりして獲得してきたはずの事物や人間との関係を、その関係を形成する際の入口に相当する情報のみで覆い隠してしまうような社会の実現に終わってしまうなら、私たちから事物や人間との関係を積極的につくろうと試行錯誤する個々人の主体性を奪ってしまうだろう。また、その情報が玉石混淆で多岐にわたるために、受動的で偏った受け取り方をすれば、公正な判断につながるものからはほど遠いものとなってしまうに違いない。

私たちは、科学技術の発展が人間のさまざまな活動に「光」を与えた反面、自然環境への負荷を増大させ、人間自身の安全を脅かす「影」をも与えたことを、すでに知っている。地球環境問題はそのなかでも重要な一例だろう。しかし、酸性雨による森林破壊や温室効果ガスの地球温暖化について、情報として知っている＝眺めているだけでは、それを課題として把握し問題を解決しようとする姿勢にはほど遠い。このことを、自分の身近な生活を見直した上で、自分には何ができるのかを考え、社会システムそのものがもつ問題点として主体的に考えられるようにならなければ、私たちがその事象と関係を結ぶ接点にならないからだ。

現代社会は、一つの情報で判断することを許さぬ、複合的な要因で生じている諸問題から成り立っていると言ってもよい。学校教育の現場では、生徒が情報を与えられ語彙を増やしていくだけでなく、具体的な事例を通して学び、それを使って言葉で説明できたり、社会人となった後も職業上・生活上生起する諸問題に対処できるような見方・考え方を、自分の従来の見方・考え方に組み込める＝成長できるような授業が肝要であろう。そのような精神態度は、物質的には豊かな社会のなかで、現状を追認し、無関心なままそのなりゆきを現在の政治に任せきりになっている、ごく私的な生き方を豊かにしていく契機になりうる。

「生きる力」の源泉とは、つまるところ自己の幸福を追求する意志にほかならない。そのためには、自分の個人史をどのように未来に向かってかたちづくっていくのかを、具体的にイメージすることが必要である。未来の個人史は自己責任による選択の連続だからである。そして、ここで引き出された当事者感覚を、さらにすすんで社会システムの選択＝改革の意志へと架橋できるような「考える力」の育成は急務であろう。課題追究型学習は、そのための準備運動として必要不可欠なのである。新学習指導要領に即して、この課題追究の型や方法を工夫することが、今年度公民科研究の主題である。

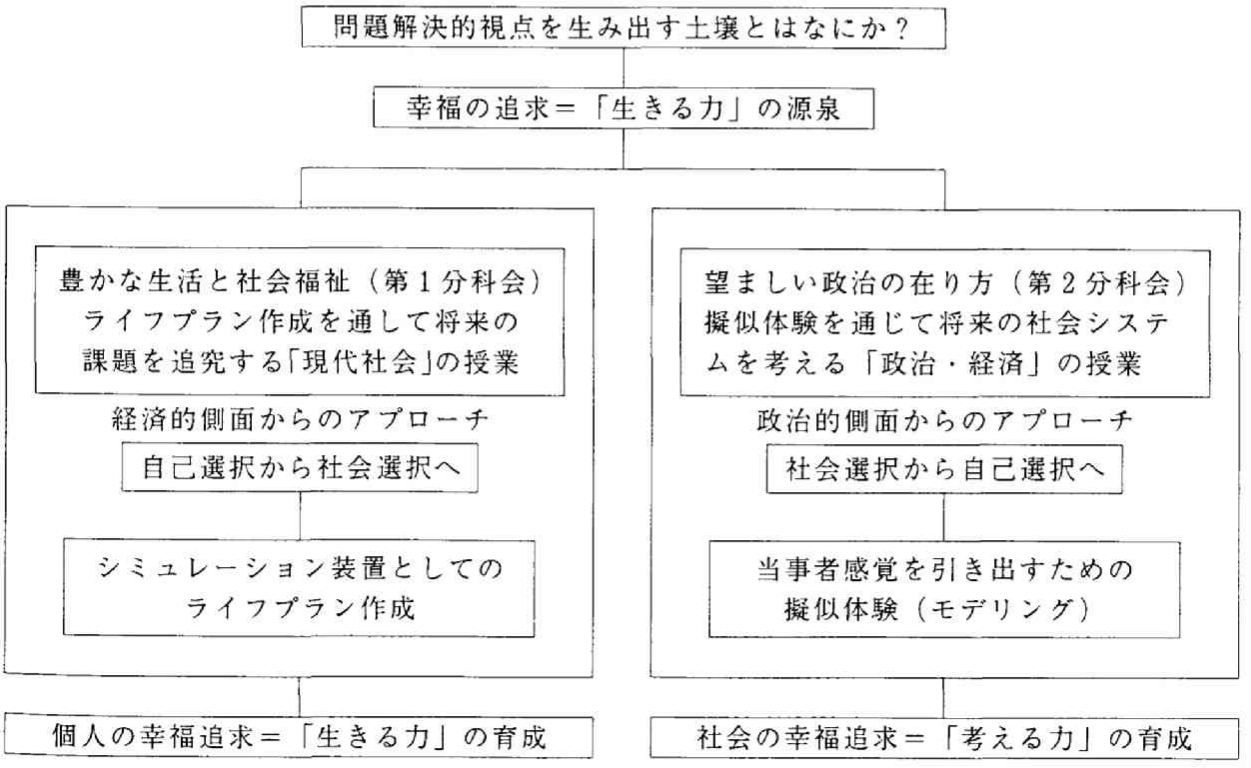
2　研究の経過

公民科部会では、主題の趣旨に沿ったテーマとして、「豊かな生活と社会福祉」と「望ましい政治の在り方」を扱うこととし、２つの分科会に分かれて研究を行った。

第１分科会では、課題追究型学習を公民科の導入部として進めるため、『現代社会』に新しく加わった大項目「現代に生きる私たちの課題」のうち「豊かな生活と社会福祉」を取り上げ、ＬＨＲでの進路指導やビジネス系の専門学校ですでに一部行われているライフプランの作成を通して、生徒自己の将来を具体的な未来像として提示する作業をとおして、人生各過程におけるさまざまな問題に対処するため、就業・結婚・出産・娯楽・住宅・医療・税などのうちから興味関心に応じて課題を設定し、特に社会保険や国民年金、公共事業など公共部門が担う社会福祉について、少子高齢社会との関連で将来の社会状況の変化を見据えながら、基礎的な説明も交えた授業展開の工夫を検討した。

第２分科会では、新学習指導要領、『政治・経済』の大項目における「現代の政治」の中の「民主政治の本質」と「現代政治の特質」を取り上げる。最初に、生徒に独裁政治と民主政治とを対比させ、生徒が身近な問題と照らし合わせながら主体的に判断する授業を組む。次に、独裁制への批判としてヒトラーを取り上げ、なぜ当時のドイツ人が民主制を放棄し、一人の人間に全権を委ね、遂には戦争に至ってしまったのかを学習する。さらに、現代の民主政治の体制を比較検討する。そのことによって、民主政治の本質を深く追究する。最後に現代政治の特質として、薬害エイズの問題を取り上げ、その中から、生徒は民主主義が国民の不断の努力によって維持、発展されて行くものである事を考察するよう指導の工夫を行った。

3　主題の展開図



Ⅱ　豊かな生活と社会福祉（第１分科会）

――ライフプラン作成を通して将来の課題を追究する「現代社会」の授業――

1　研究内容と方法

本分科会では、全体で４時間の単元学習を設定した。第１・２時では、ライフプランの基礎となる諸活動を、人生上のいつ頃の時期に設定するかをアンケート方式で記入し、さらにその諸活動にかかる費用を生涯賃金との差で考える作業を行わせる。第３時では、自己の身体・生命の安全が脅かされた事態に備える社会保険制度について紹介し、それを補う生命保険や老後に備えるための年金制度についても説明し、その多くを私費でまかなうアメリカ合衆国の例、日本以上の高福祉を実現し、現在ではさまざまな問題も抱えるスウェーデンの例を取り上げ、比較しながら将来の高齢福祉社会の進展を見据えた公共部門の規模も考える。第４時では、学卒無業者（いわゆるフリーター）の問題を取り上げ、ライフプラン作成に際して見え隠れする、多様な経験をしたい、有名になりたいなど、若者文化で個性を発揮したいとする「夢」指向を実際問題として検証することを通して、「豊かな生活」とはどういうことなのかを考える。この４時間の授業の後、生徒は個々に、自己の未来において生起してくる諸課題のうち、最も関心のもてる主題を設定して、課題追究の学習に取り組むことになる。なお、新学習指導要領における関連分野は、「現代社会」の「(1)　現代に生きる私たちの課題」のうち、「豊かな生活と福祉社会」である。

2　指導計画

	学　習　項　目	具体的な学習内容・学習項目	留　意　点
《１》ライフプランの作成			
第１時	ライフプランの作成	・自己のライフプランを作成する。 ・生涯の収入と、諸活動にかかる費用をおおまかに計算する。	・具体的に考えさせるようにする。 ・収支の差を計算させる
第２時	ライフプランの検討	・ライフプラン中の収入の種別や支出の各項目を検討する。 ・租税について理解する。	・給与明細書や各種カタログなどを具体的に示す。
《２》ライフプランからの展開例			
第３時	社会保険をめぐって	・社会保険を理解する。 ・これからの高齢社会の中での社会保障や国家の役割を考える。	・将来の自分にも関わる問題であることを意識させる。
第４時	君は「フリーター予備軍」になっていないか？	・「フリーター」について考えることを通じて、働くことの意味や「豊かな生活」について考える。	・現時点のライフプランと現実のギャップに気づかせる。
《３》ライフプランから展開する課題追究学習			
第５時～	各自の課題追究学習	・ライフプランの作成をもとに、第３・４時の授業を参考にしながら自分の将来に関わることがらについて個々に主題を設定して課題追究学習を行う。	・身の回りの出来事から社会システムの選択までカバーできるよう適宜助言する。

3　指導案

第1時　ライフプランの作成

(1)　本時のねらい

「ライフプラン」の作成を通じて、将来の進路、収入、家族構成、経済活動を考え、将来起こる選択や決定を意識させる。また、各種の保険制度が予想外の事態に対して必要不可欠な制度であることを認識させる。

(2)　本時の展開

	学　習　項　目	学　　習　　活　　動	指導上の留意点
導入10分	生涯賃金の実態	・「ライフプラン」作成前に、各種資料を参考に、生涯賃金と生涯に必要な金額を計算する。	・各種の白書を示し、平均賃金や職種・年齢による賃金差に注目させる。
展開30分	①人生設計の作成	・ライフプランの計算の前段階として将来設計を問うアンケートに答える。	・不確定要素が大きいので、細部にこだわらず、アンケート記入させる。
	②将来の収入ついて	・アンケートの結果に沿って資料プリントを使い、生涯の家計収入の概算を出す。	
	③必要なお金について ④いくら余裕があるか？ ⑤予想外の支出	・生涯に必要となるお金を項目別に整理し、具体的に金額計算する。 ・予想収入から支出を引いた余剰金を計算する。 ・アンケート項目以外の基本的な支出（直接税や各種保険費用）があることを理解する。 ・アンケート結果（多くは支出が収入を上回ること）から、予想以上に経済的自立が大変なことを理解する。	・作業はシミュレーションであり、金利や物価動向、収入の伸びなどの不確定要素があることを意識させる。 ・各個人で考えられる収入（遺産相続等）や支出があるか考えさせる。 ・普段は意識しない所得税や保険制度を強調する。
まとめ10分	保険制度の存在	・将来の設計は予定通りに行かないこと、予想外の事態に対して経済的な解決の方法を考える。 ・予想外の事態に対応するために公的な社会保険制度や私的な生命保険・損害保険制度があることを理解する。	・突然の死や大病、各種災害の可能性を認識させる。 ・保険制度については、簡単にふれるだけにする。

(3)　評価の観点

①　アンケートはすべて将来のことなので、不確定要素に対して具体的にイメージできるかがポイントになる。作成過程でいい加減に記入させず、真剣に考えて出来たかどうか。

②　将来の収入や支出についての意識が深まったか。予想外の支出や収入の設定が出来たか。

③　将来のマイナス要因を考えること、具体的な解決方法を考えることが出来たか。

第2時　ライフプランの検討

(1) 本時のねらい

「ライフプラン」の結果から予想外の支出項目である直接税・各種保険があることを理解させる。また、個人の興味にあわせて支出項目を具体的に検討する。

(2) 本時の展開

	学習項目	学習活動	指導上の留意点
導入10分	所得税・住民税・保険の存在	・給与明細書を使い、収入から税金を納めること、就職後は社会保険に加入することを理解する。	・特に生徒のアルバイト経験者から具体例を提示する。
展開30分	①計算の留意点	・収入には企業規模別・産業別・学歴別格差があること、支出にも個人によって大きな違いがあることを理解する。	・各種統計の提示
	②個別展開	・ライフプランの各項目について、個人の興味・関心にあわせて各自で資料にあたり、具体的な金額を計算する。	・具体的な生涯賃金、住宅路線価、自動車カタログ等の資料を示す。
	③所得税・住民税とは何か？	・各種白書を資料にして生涯に直接税をどれくらい納めるか理解する。	・各種控除、税率の累進制等に注意させる。
	④社会保険とは何か？	・社会保険には健康・厚生年金・雇用の各保険があることを給与明細書を通して理解する。	・保険が必要なケースを自動車保険を例に示す。
	⑤生命保険・損害保険	・人生がプラン通りに行かない場合はどういう状態が考えられるか、どうしたら対応できるか考え、具体的に書く。	・一般的な生命保険のモデルプラン・カタログを使い展開する。
まとめ10分	税金・保険の重要性	・収入に比べて税金・保険の額が高いこと、なぜそれだけ必要なのか考える。 ・交通事故・火事等による家屋の被害や癌などの病気等でどれくらいのお金が必要になるか理解する。	・経済破綻に関して、保険が多くの役割、大きな効果があることに気づかせる。

(3) 評価の観点

① 直接税・各種保険がどれだけ生活に関わっているか。その必要性を理解できたか。

② 将来の予想外の事態に対して解決方法を考えることができたか。保険制度の重要性を認識したか。

第3時　社会保険をめぐって

(1) 本時のねらい

第１・２時で簡単にふれた社会保険について、その必要性を具体的に考えさせ、社会保険制度の概要を理解させる。そして、それについて大きく異なるやり方をとっているアメリカ合衆国とスウェーデンをとりあげ、両者の比較を通じて、これからの日本の社会保障や政府のあり方について考えさせる。

(2) 本時の展開

	学習項目	学習活動	指導上の留意点
導入10分	人生におけるリスク	病気になった場合、どのような費用が、どの程度必要か知る。 ・病気、入院、重病の場合など	・医療費に関する資料を用意 ・それ以外のリスクに関わる費用もおおまかに示す。
展開30分	社会保険	社会保険について理解する。 ・社会保険についての概略 現在の日本の医療、年金、介護、労災、雇用の各保険制度の概要を理解し、保険料や給付額、給付内容を知る。	・資料を用意する。 ・ワークシートに保険料など計算させながら記入させ、自分のライフプランの中で考えさせる。 ・民間医療保険、生命保険についても簡単にふれる。
	アメリカの社会保障制度	医療制度を中心にアメリカの社会保障制度を理解する。 ・国民皆保険の制度はない ・民間医療保険の発達	・資料を用意する。 ・背景、国民の意識、問題点にもふれ、考えさせる。
	スウェーデンの社会保障制度	医療制度を中心にスウェーデンの社会保障制度を理解する。 ・高福祉　・高負担	
	典型的な２つのタイプの社会保障制度について	医療制度を中心にそれぞれの国の社会保障制度について比較しながら考える。	・「大きな政府」「小さな政府」 ・政府の役割 ・租税か保険か なども考えさせる。
まとめ10分	これからの日本	これからの日本のあるべき社会保障について考える。 ・政府の規模、役割など	・今後の高齢化の進行についても資料とともに示す。 ・自分のライフプランとの関連も意識させる。

(3) 評価の観点

① 社会保険の必要性を十分に理解し、これからの自分の生活にも関わる問題であるという意識をもって考えることができたか。

② 社会保障のさまざまなかたちや方向性に対して、興味・関心を持って目を向けられたか。

③ これからの社会保障や政府のあり方について、考えていこうとする意識がもてたか。

(4) 資料

ワークシート１（自分が支払う社会保険料はいくらぐらい？）　（抜粋）

①健康保険保険料

一般の労働者(政管健保)の場合　標準報酬月額の８．５％（それを労使で折半）
賞与等の１％（本人負担はその５分の１）

（標準報酬月額は、8月1日を基準としたその前3ヶ月の報酬の平均金額をもとに算定）

・年収５５０万円の人の場合

標準報酬月額は約（　　）円

１ヶ月の保険料は　約（　　）円×０．０８５＝約（　　）円

そのうち、本人の負担分は

約（　　）円×０．５＝約（　　）円

⟶　１年間では　約（　　）円

自分の１０年ごとの保険料を計算して、ワークシート２に記入しよう

③介護保険保険料

４０才～６４才では…一般労働者の場合、標準報酬月額をもとに算出
一人平均　月３１００円（政管健保の場合）である（それを労使で折半）

１年では　（　　）円

６５才以上では…所得段階に応じ市町村で設定、一人平均　月２８８５円である

１年では　（　　）円

⟶自分の１０年ごとの保険料を計算して、ワークシート２に記入しよう

⑤雇用保険保険料

原則として、標準報酬月額の１．４５％（そのうち本人負担は０．５５％）

・年収５５０万円の人の場合

１ヶ月の保険料の本人負担は　約（　　）円×０．００５５＝約（　　）円

１年では　（　　）円

⟶自分の１０年ごとの保険料を計算して、ワークシート２に記入しよう

（※数値は、東洋経済新報社「社会保障年鑑 2000 年版」による）

ワークシート２（社会保険料一覧表）

保険料	１０代	２０代	３０代	８０代～	合　計
健康保険					
年金保険					
介護保険					
雇用保険					
合　計					

ワークシート（生涯の収入と支出　一覧表）

			１０代	２０代	３０代		合　　計
（　）才の時 私は							
その頃は こんな私でいたい							
収入	賃金	本人					
		配偶者					
	年　金						
	収入合計						
支出	基本生活費		一人暮らし　月１２万円 … 年１４４万円 夫婦　月２０万円 … 年２４０万円 子ども１人　月　６万円 … 年７２万円×				
	子どもの教育（公立）		中学校まで　３５０万円 高校まで　５７０万円　（　　）円× 大学まで　１１００万円				
	自動車		（　　）万円×（　　）台＝（　　）				
	住宅	賃貸料					
		住宅購入					
	旅行	国内					
		海外					
	趣　味		年（　　）万円×（　　）年＝（　　）				
	税						
	社会保険料						
	支出合計						

第４時　君は「フリーター予備軍」になっていないか？

(1)　本時のねらい

せっかくライフプランを立てながら、実際には職業人としての将来設計に関して、ファッションとしての「夢」と、着実なキャリア形成の現実との間が不分明になっている生徒が多いことが予想される。本時では、特に大都市とその周辺で急増する高校生の「フリーター」指向を取り上げ、進路指導の観点も織り込みながら、将来の「豊かな生活」が、「いろいろ経験したい」「合わない仕事はしたくない」「有名になりたい」「夢を追い続けたい」といった近視眼的な職業・勤労観からは必ずしも実現しないことを理解させ、きたるべき社会を生きぬくための基本的な姿勢を形成し、かつ自身にとっての「豊かな生活」を模索する足がかりを獲得することを目標とする。

(2) 本時の展開

	学習項目	学習活動	指導上の留意点
導入10分	ライフプランの再検討	・前時で作成したライフプランを見直し、再検討する。記入した出来事が極端に少なかったり、不自然な出来事の連続や実現可能性の薄い出来事がないかチェックする。	・前時作成のライフプランをあらかじめ回収しておき、問題になる部分を生徒毎にチェックしておく。
展開30分	キャリア・イメージの難しさ	・チェックが特に多かった生徒のプランを紹介し、本人にその理由を述べてもらい、将来の夢とそれを具体的な職業と結びつけることの難しさを考える。	・プランを紹介する生徒にはあらかじめ断っておく。プライバシーの尊重に努めること。
	フリーターとは何か	・最近の高校生の中にフリーター指向が出てきていることを紹介し、フリーター指向にはどのような類型があるのかを理解する。	・資料を配布し、個々の類型が理解しやすいよう実際の経験者の証言など具体例を挙げる。
	将来の職業を考える	・ワークシート記入作業を通して、自分が選ぶ職業と興味・関心や適性の判断との関連などを考える。	・産業・業種・職種の一覧表も配布し、自分の選ぶ職業と適性を考える際の参考とする。
まとめ10分	仕事を通して得られるもの	・ワークシート記入結果を踏まえ、「働くということ」が名声・金銭の獲得や夢の実現だけではなく、自己の適性や興味・関心をも考慮して考えられるべきことを理解し、就職難の現代社会における「生きがい」について考える。	・社会福祉の観点から職業安定所などの公共部門が職業紹介や労働市場の拡大に果たしている役割も指摘する。

(3) 評価の観点

① フリーター指向が、高校生だけでなく、大学生や20代の会社員などの世代にも見られることを理解したか。就職した後も「仕事が合わない」などの理由でこの指向を再びもつこともありえることを理解した上で、フリーターをめぐる職業観について考えることができたか。

② 「働くということ」に対する自分のスタンスを考え、それを具体的な職業と結びつけることができたか。仕事を通して得られる「生きがい」について、考えを深められたか。

(4) 資　料

1．フリーターの類型（日本労働研究機構作成）

類　　型	概　　要	割　合
モラトリアム型		
A　離学モラトリアム型	職業や将来に対する見通しを持たずに教育機関を中退・修了し、フリーターとなったタイプ	男性の40％ 女性の40％
B　離職モラトリアム型	離職時に当初の見通しがはっきりしないままフリーターとなったタイプ	
夢追求型		
C　芸能志向型	バンドや演劇、俳優など、芸能関係を志向してフリーターとなったタイプ	男性の20％ 女性の30％
D　職人・フリーランス志向型	ケーキ職人、バーテンダー、脚本家など、自分の技能・技術で身を立てる職業を志向してフリーターとなるタイプ	
やむを得ず型		
E　正規雇用志向型	正規雇用を志向しつつフリーターとなったタイプ、特定の職業に参入機会を待っていたタイプ、および比較的正社員に近い派遣を選んだタイプ	男性の40％ 女性の30％
F　期間限定型	学費稼ぎのため、または次の入学時期や就職時期までといった期間限定の見しをもってフリーターとなるタイプ	
G　プライベート・トラブル型	本人や家族の病気、事業の倒産、異性関係などのトラブルが契機となってフリーターとなったタイプ	

2．ワークシートの一部（全国高等学校進路指導協議会編『大学ガイダンスノート』実務教育出版より）

「働くということ」の意味や意義を、具体的な職業を例に考えてみよう。

■　私があこがれる職業

職　業　名	その職業にひかれる理由	どんな能力・資格が必要か

■　上記の職業について、次の点からチェックしてみよう。

興味・関心に合っている	どんな興味？	
性格や行動の特性に合っている	どんな性格？　行動の特性？	
仕事にやりがいがある	どのような点に？	

Ⅲ　望ましい政治のあり方（第２分科会）

―擬似体験を通じての将来の社会システムを考える「政治・経済」の授業――

１　指導計画

	学　習　項　目	具体的な学習内容・学習活動	留　意　点
	《１》望ましい政治とは何なのか考えよう		
第１時	独裁政治は悪いか	・身近な問題から望ましい政治の在り方を考えるきっかけをつかむ。 ・ワークシートで独裁政治と民主政治を比較し、それぞれについての問題意識を持つ。	・人々が自己の都合を重視したり無関心であることに注目させる。
第２時	民主政治を批判する	・多様な独裁政治の形態を理解し、民意をまとめる困難さに気づく。 ・現代日本政治の諸課題から民主政治の問題点の概要を学習する。	・独裁政治の民衆抑圧にも触れる。 ・身近な問題に引きつけて考えさせる。
	《２》民主政治の大切さを知ろう		
第３時	強力な指導者（ヒトラー）に全権を委任した経緯	・議会制民主主義を放棄してしまう実例を知り、危険性と必然性について学習する。	・現代日本の議会制民主主義の現状と比較させる。
第４時	君の心が戦争を起こす	・なぜヒトラーが支持されたのかを考える。 ・身近な問題に似ていることに気づく。 ・独裁制の危険性と民主主義の重要性について理解する。	・いじめなど身近な問題に引きつけて考えさせる。
	《３》民主政治の基本原理を知ろう		
第５・６時	現代の民主政治体制	・民主政治の意義と原理を理解する。 ・議院内閣制と大統領制を比較する。 ・制度や機構の維持運用に対する主権者の不断の努力の必要性を理解する。	・基本原理相互の関連を重視させる。 ・具体例を示す。
	《４》現代日本政治の諸課題を知り、望ましい政治を作るための行動を考えよう		
第７時	“薬害エイズ”問題にみる日本政治の諸課題（Part１薬害エイズって何？） （指導案は省略）	・薬害エイズ問題の概要を知り、ワークシート作業から企業、行政、医療機関の三者の関係を理解する。 ・行政の機能の重大性を理解する。 ・政治の力と世論の力を理解する。	・具体例を示し、リアルに伝えるよう工夫する。
第８時	“薬害エイズ”問題にみる日本政治の諸課題（Part２なぜ？薬害エイズ） （指導案は省略）	・企業、行政、医療機関の行動についてのシミュレーションを通して問題解決の視点を探る。 ・主権者の主体的な行動が民主政治を支えるものであることを理解する。	・正答を求めるのではなく、可能性を示す。 ・身近にある類似点を示し自分に引きつけて考えさせる。
第９・10時	政治への国民の参加について	・行政・企業・国民・医師・マスコミの各立場を調べ予習するとともにでロールプレイを行いながら問題解決の方途を探る。 ・各立場（ポジション）が持つ制約を知り、それを乗り越える可能性を追究する。	・状況設定が内包する問題点を示唆する。 ・総合的な提案をするように促す。

2　指導案

＜1＞望ましい政治とは何なのか考えよう

第1時　「独裁政治は悪いか」

(1)　本時のねらい

望ましい政治の在り方について考える導入部である。民主政治の在り方を考える観点から、独裁政治を民主政治に対立する政治として取り上げ、両者を対比させながらそれぞれについての問題意識を持たせる。

(2)　本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入10分	生徒の手による文化祭とは？	・文化祭の出し物について、文化祭委員主導型と生徒話し合い型、どちらがいいか考える。 （文化祭委員主導の回答例：めんどくさいから文化祭委員がやってくれた方がいい。話し合い型の回答例：やっぱり自分たちでやりたい。）	・ワークシート①を配布 ・それぞれ挙手させ数人に意見を聞く。 ・自分の都合しか考えていないことに気づかせる。
展開35分	あなたが望む政治とは	・住み良い独裁政治の国（＝A国）と腐敗している民主政治の国（＝B国）を比較し、自分がどちらを支持するかを考える。 ・A国選択者はB国選択者へ、B国選択者はA国選択者へ、それぞれ批判を考える。 （A国選択者への批判）支配者が変容したらどうするのか。国民にはどうすることもできないではないか。 （B国選択者への批判）議員が腐敗しているということはそれを選んでいる国民自身が不真面目だということではないのか。	・ワークシート②を配布 ・数人に発表させ、次の発問につなげる板書をする。 ・数人に発表させ、次の展開に関連させるように板書する。
	独裁政治と民主政治の問題点	・それぞれの批判の具体例を考え、問題意識を持つ。 （A国選択者への批判の具体例） どんな国があるか？ （B国選択者への批判の具体例） 日本の選挙体質、圧力団体、低投票率	・考えさせ、数人に発表させる。 ・簡単な紹介にとどめる。
まとめ		・独裁政治について、自己の都合や無関心を理由に支持するものがいることを確認する。 ・民主政治では主権者の行動が問われることを確認する。	

・　A国について：

独裁についての議論は多岐にわたるが、独裁についての以下のような定義、すなわち「①行政・立法・司法・軍事などの諸権力が身分的支配者や君主ではないところの一人または少数のグループに実質的に集中することであり、②それは現行法体系を停止あるいは無視することによって成立し、③その結果、市民的自由権は大幅に否認され、④諸権力手段は専制的に使用され、しかも⑤政治的　決定は、イデオロギーや使命感によって迅速かつ脅迫的になされやすいという特徴を持つ政治支配の形態」（高畠通敏『新版政治学への道案内』三一書房1984）を押さえた上で、授業においては、民主政治に対立する政治の在り方として、民意が極めて反映されにくく主権者の自由な政治的意思表明が弾圧される上記③④⑤を強調したモデルを設定する。

・　B国について：

日本をモデルとする。民主政治の基本原理である、国民主権主義、議会制民主主義、権力分立制、法の支配が制度として整っている一方で、制度の運用、主権者の行動等の面で問題を抱えているモデルである。

(3)　評価の観点

①　独裁政治を支持する者がいることに気づくことができたか。

②　政治家の腐敗は主権者の行動に依拠するものであることに気づくことができたか。

第2時　「民主政治を批判する」

(1)　本時のねらい

独裁政治の具体的な事例および民主政治の問題点についての具体的な事例を取り上げ、現実の民主政治の課題についての問題意識を深め、望ましい政治の在り方を探らせる。

(2)　本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入10分	生徒の手による文化祭とは？	・前時のプリントの結果を見ながら、文化祭の出し物をどうやって決めればよいか考える。 （Qどうやって決める？　A話し合えばいい。　Qどうやって？　A文化祭委員が司会して、みんなで意見言って、採決して。　Q文化祭委員は司会できる？みんな、ちゃんと意見とかいうの？バラバラの意見が出てきたらどうするの？「早く帰りたいからなんでもいい」とか言う人いるんじゃない？） ・民意をまとめる困難さに気づく →みんなの意見をまとめてくれるリーダーが必要だ。	・資料（前時の生徒の意見をまとめたもの）を配布する。 ・前時のプリント結果を読む時間を持つ。 ・指導者が必要なことに気づかせる。 ・クラスのメンバーが積極的でないと、決めることが困難なことに気づかせる。 ・クラスのメンバーがクラス全体のことを考える必要があることを気づかせる。 ・説教調にならないよう気をつけたい。

		→メンバー一人一人がクラスのことを考えてくれなきゃだめだ。	
展開 35分	さまざまな独裁政治（リーダーが必要だ） ナポレオン 開発独裁 民主集中制、他	・多様な独裁政治の形態があることを理解する。 ・ナポレオンの例から、独裁は政治的安定をもたらす一面があることを理解する。 ・開発独裁の例から、経済発展には強力な指導力が必要な場合があることを理解する。	・資料を配布する。 ・それぞれの例はあくまで一面であり、一方で民衆の抑圧もおこなわれたことにもふれる。
	現代日本政治の課題からみる民主政治の問題点（一人一人がちゃんと考えなきゃだめだ） 日本の選挙 圧力団体 低投票率	・制度が整っていても、主権者の行動と運用如何では、民意の反映は失われる危険があることを理解する。	・資料を配布する。 ・批判的な視点ではなく、クラス文化祭出し物問題に引きつけて誰もが陥る可能性を示す。
まとめ5分		・望ましい政治の在り方について考える。（主権者が主体的にリーダーを選択し監視する民主政治）	・次時の予告を含んだ問題意識を持たせる。

(3) 評価の観点

① 多様な独裁政治の形態を理解できたか。

② 民主政治の問題点を理解できたか。

③ 望ましい政治の在り方を追究しようとしているか。

〈資料〉

《ワークシート①》
どっちがいい？
①文化祭。クラスの出し物どっちがいいですか。（どちらかに○をつける）
A：文化祭委員がなんでも決めてみんながそれに従ってやっていく型
B：みんなで話し合って決め、それに従ってやっていく型
●それはなぜですか。（　　）
②文化祭。クラスの出し物みんなで決めるとして、どうやって決めたらいいですか。具体的に書いてください。
（　　）

《ワークシート②》
どっちがいい？　その2
①この世に次の二つの国しかないとしたらあなたはどちらの国に住みたいですか。
A国　：　とても住み良いんだけど独裁政治の国
この国は政治に対してまじめな一人の支配者に支配されている国です。その支配者は国民が幸せに暮らせるようにと、いろいろな施策を迅速確実におこないます。普通に暮らしている分にはなに不自由のない生活が保障されています。しかし、国民が政治に口を出すことや支配者を批判することは絶対に許されません。

即死刑です。この点についてはとても厳しく取り締まりがあります。つまり、いい支配者なんだけど国の政治については一切物が言えず、刃向かうとちょっと怖い国です。

B国　：　民主政治なんだけど国会議員が腐敗している国

この国は民主的な政治を行うための制度が整っている国です。選挙をして国会議員を選んでその人達の話し合いによって政治が決まります。しかし、国会議員達はあまりまじめではありません。彼らは腐敗しています。国民もあまり心地よくは暮らしていません。でも政治に関して国民は全く自由に物が言えます。国会議員をいくら批判しようと捕まることはありません。立候補も年齢以外の制限はありません。つまり、国会議員は腐敗しているんだけど、政治について自由に考えることができ、場合によっては国民が政治参加することも可能な国です。

さあ、どちらがいいですか。よいと思う方に○をつけてください。　　A国　・　B国

②どうしてその国を選んだのですか。

（　　）

＜2＞民主政治の大切さを知ろう

国の指導を一人に任せてしまうことの危険性―ヒトラーを例として―

第3時　強力な指導者（ヒトラー）に全権を委任した経緯

(1)　本時のねらい

生徒が、議会制民主主義の精神を放棄して、一人の指導者（ヒトラー）に全権を委任してしまった経緯を勉強することによって、その危険性を現代の民主主義の現状と照らし合わせながら、考察する。

(2)　本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入10分	ヒトラーという人物の紹介	・ヒトラーの写真を提示する。アウシュビッツのユダヤ人虐殺の話をする。 ・ヒトラーの生い立ちを簡潔に話す。	・ヒトラーの危険性を認識するようにする。
展開35分	ヒトラーの議会制民主主義批判の紹介 ワイマール共和国の崩壊と「独裁制」への道	・『我が闘争』を資料として、生徒に読ませる。 ・ワイマール共和国における議会制民主主義の混乱ぶりとドイツの困難な状況が、当時のドイツ国民に、強力なリーダーシップを発揮する政治家を求めたことを理解する。 ・全権委任法によって、ヒトラーに全権を委ねた経過を説明する。	・現代日本の議会制民主主義の在り方及び総理大臣のリーダーシップについて考えさせる。
まとめ5分	なぜヒトラーに全権を委ねたのか	・ヒトラーに全権を委任した経緯は理解したが、ではなぜもっと立派な指導者に委ねず、ヒトラーのような男に委ねたのかを考察する。	・左のような疑問を生徒は持つ。 ・第4時にこの疑問を深く考察する。

(3)　評価の観点

①　現代日本の民主主義とワイマール共和国における議会制民主主義の現状とが比較でき

たか。

② ワイマール共和国が「ヒトラーの独裁」に至ってしまった危険性と共にその必然性を理解できたか。

③ なぜヒトラーのような男に全権を委ねてしまったのかという疑問が持てたか。

第4時　君の心が戦争を起こす

(1) 本時のねらい

第3時の授業を受けて、なぜ当時のドイツ人がヒトラーを支持したのかを追究する。さらに戦争に至ってしまった理由について深く追究し、それが自分の身近な問題と類似していることに気付く。

(2) 本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入10分	復習とヒトラーのビデオ鑑賞	・前時の復習を簡潔に行い、ヒトラーの演説のビデオを見せる。	・ヒトラーという人物とそれを熱狂的に支持する人たちを実感として知ってもらう。
展開35分	なぜヒトラーを支持したか	・ヒトラーの巧みな大衆操作を知る。 ・当時のドイツ人の置かれた状況とその怒りと夢について話し、それをヒトラーが語ったことを話す。	・具体例を挙げて説明する。
	なぜ戦争に至ってしまったのか	・ヒトラーを支持した層、反対した層、傍観した層、無関心な層に分け、それぞれについて、考察する。 ・丸山真男の論文を資料にして戦争の芽が徐々にできていく過程を説明する。	・いじめの問題など生徒の身近な問題と照らし合わせながら説明する。 ・生徒とともにジェスチャーを交えて説明する。
まとめ5分	「独裁制」の危険性	・君の心が戦争を起こすというこの授業の題名の意味を考えさせる。そこから生徒は、ヒトラーの例から一人の人間に政治を任せることがよいことなのかどうか考える。	・さまざまな欠陥はあるが民主政治の大切さが生徒に深く認識されるようにする。

(3) 評価の観点

① ヒトラーを支持してしまった社会的、心理的メカニズムを理解したか。

② 上記のことが現在の自分たちにもありえる事だと追究したか。

③ 「独裁制」の危険性と民主主義の重要性について、切実に捉えたか。

＜3＞民主政治の基本原理を知ろう

第5・6時　現代の民主主義体制

(1) 本時のねらい

前4時間の授業をふり返り、民主政治の意義とその原理を理解するとともに、世界の政体

を比較し、わが国の政体の特徴と、その問題点を知る。

(2) 本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	民主政治の正統制	・前時までの授業をふり返り、(個人と社会の幸福追求という観点から) 民主政治が現在、世界において正統制を認められていることを知り、その背景となる歴史的経験との関連を理解する。また、ドイツの経験はわが国の経験と類似する面もあることを知る。	・A国とドイツの類似性や相意点に言及し、第二次世界大戦が人類にとって、または日本にとっても、そこから多くを学ばなければならない経験となっていることに触れる。
展開	民主政治の原理 民主政体の比較 日本国憲法にみる日本の政治体制	・民主政治を支える原理である国民主権や代議制、人権の保障、権力の分立、法の支配などを理解し、なぜそれらが民主政治を支えるものとなっているかを考察する。 ・民主政体の代表的なものであるイギリスの議院内閣制とアメリカの大統領制を比較し、その相違点と共通点に気付く。民主政体にもいろいろなものがあり、各国それぞれが、その国の歴史や文化、社会に合った政体を持っていることを理解する。 ・日本の現在の政治政体は、イギリスの議院内閣制に似ていることに気付く。 ・旧憲法下の体制と新憲法下の体制を比較し、その相違点に気付く。どのような意図から現在のわが国の政治体制がつくられているのかを考察する。 ・ドイツの現政体も、ワイマール時代への反省から、どのような配慮がなされているかを知る。	・用語の説明に終始することなく、相互の関連により民主政治が成り立っていることへの理解を促す。 ・三権分立の原則の意義について触れ、各国がその原則を踏まえながら政体を工夫することによって、それぞれの政治風土をつくっている具体例を示す。 ・日本が第二次世界大戦へと突き進んでいった原因を、旧憲法下の体制の問題点から考察するよう促す。 ・ドイツの大統領の性格、または内閣不信任制度における建設的不信任投票など、具体例を示す。
まとめ	日本の政治体制の問題点 国民主権	・日本の政治体制・機構において、国民審査、地方政治と国政との関係、行政の在り方などにどのような課題があるか考える。 ・制度や機構は絶対的なものではなくその機能が十分に発揮されるように修正され、その運用上の工夫が不断になされる必要があること、またそれが主権者である国民の義務でもあるのが民主政治の根本原理であることを理解する。	・情報の公開、地方分権化、行政の民主化などの動きに触れる。 ・政治権力は国民より設定されるが、その行使のあり方も、国民により吟味される必要があることを指摘する。

＜資料＞　※第８校時にて使用

シミュレーションシート

アメリカでは早期にエイズへの対応がなされたのに、日本ではアメリカと比較して２年４ヵ月対応が遅れた。その間の企業(製薬会社)・行政・医療機関の態度や行動は、どのような過程で決定されたのか。想像しながら、意志決定過程の３つのモデルのどれに当てはまるか考えよう。

＜問題の２年４ヵ月(1983年３月～85年７月)＞

アメリカでは……

1983年３月　アメリカ防疫センター(ＣＤＣ)が、次のことを正式発表した。
「…血友病患者のエイズは、治療薬として使われている非加熱血液製剤が原因とみられる…」
→エイズはウィルスであり、輸血による感染経路が疑われる、という見解に対して、血友病の治療薬としてエイズに対する有効性が期待された加熱製剤が認可された。

1984年５月　エイズウィルスは同定され、抗体検査も開始される。

同年９月　血液製剤に含まれるエイズウィルスを加熱すると不活性化することが証明される。

同年10月　アメリカ血友病財団(ＮＨＦ)も非加熱製剤から加熱製剤へ変更すべきことを勧告。

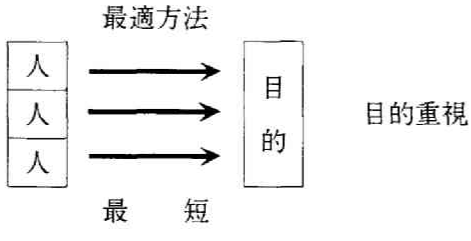
日本では……

1985年７月　加熱製剤は５社一括して承認される。

意志決定過程の３つのモデル

ⓐ　合理的決定

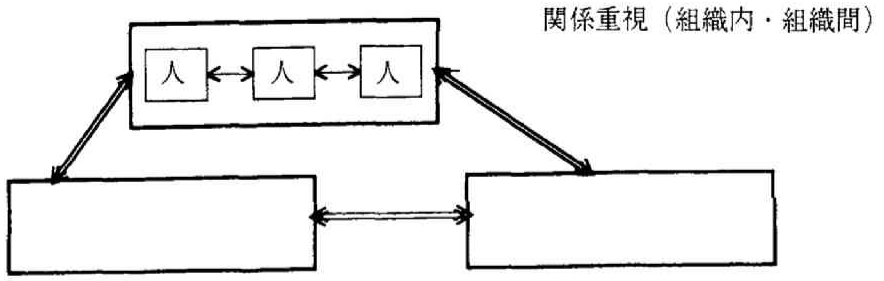
明確な問題意識があり、解決までの過程が目的に向けて合理的で首尾一貫している。迅速に決定する。



ⓑ　組織的決定

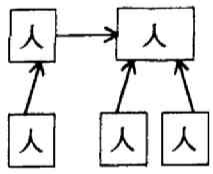
組織内の作業手続きに基づいて決定(前例重視)。各組織の要請を重視する。

また、組織内の利益を重視する傾向。決定の結果が合理的でなくても説明が可能。



ⓒ　政治的決定

組織内の人間関係の反映した決定。個々人の問題への利害と駆け引きを重視する。



力関係・利害重視

注　G.Allison の政策決定過程論を参考に考案したモデルである。

＜4＞現代日本政治の諸課題を知り、望ましい政治を作るための行動を考えよう

第10時　政治への国民の参加について

(1)　本時のねらい

望ましい政治のあり方のまとめとして、架空の状況設定で行政・企業・国民・医師・マスコミの立場から、どのように問題解決に向けて関わっていくかのロールプレイを行う。それぞれの立場の持つ制約を乗り越えて、いかに望ましい結果を引き出すか、シミュレーションする中で、国民が具体的なビジョンを持って、政治に関わっていく重要性と主権者としてそれを担う責任に気づく。

ロールプレイでは、それぞれの立場から主張、行動することによって、それぞれの立場の論点、状況を把握させ、お互いの立場を理解させるようにする。今回のロールプレイでは、さらに、お互いの立場（ポジション）からの見解が、課題に対して建設的な合意や提案の創造に結びつくよう、工夫して進めることとする。

また、第９校時においては、ロールプレイの方法を学ぶとともに、行政・企業・国民・医師・マスコミについて、インターネットや担当者を訪問するなどにより、それぞれの役割を十分理解する調べ学習を行う。

(2) 本時の展開

	学習項目	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	ロールプレイの確認	・架空のA病の発生に対して、それぞれの立場（ポジション）からどのように関わっていくかをロールプレイすることと、その状況設定について理解する。	・状況設定のポイントとなる点をわかりやすく提示できるように配慮する。
展開	5者の立場上の制約	・5つのグループに分かれ、それぞれの立場の制約についてあらかじめ確認する。	・国民とマスコミの立場は、この状況についていまだ知らされていないという設定なので、もし仮にA病の存在を知ったらどうするか、または他の立場に対して、どのように対応してほしいかを考えるように指示をする。
	各立場の方針制作	・グループ毎にどのような行動をとるか方針を立てる。また、その方針を遂行するにあったって、他の立場への要望事項を挙げておく。	・時間を決めて相談タイムをとる。
	各立場の方針、要望発表	・各立場の方針要望をきき、それに対して、どのような回答をするか、また、方針を変更する必要はないか、他の立場への質問等を協議する。	・「マスコミ」は各立場へのインタビュー事項を考える。
	要望への回答	・あらかじめ司会者をたてて各立場同士で質疑応答をする。	
	合意の形成（討論）	・この事態にどのように対応するべきかを討論する。	・各立場の要求を主張するだけでなく、総合的な提案をするように促す。5つの立場以外の立場への要望・依頼も可能である事を示唆する。
	最終決論	・各立場毎に再度、方針と他の立場への要望を話し合う。	
まとめ	結論発表	・各立場の決定を発表し、このロールプレイによって気づいた事など、互いに感想を述べ合う。	

(3) 評価の観点

① それぞれの立場の持つ制約を乗り越えることの難しさを感じることができたか。

② 問題解決に向けて、自他の立場を活かし合う発想を持つことができたか

③ お互いのコミュニケーションを通して、事態を解決に導く糸口を探る事ができたか。

④ 情報の公開は、責任の分散につながり、最終的には国民の自己責任が問われる事に気づいたか？

＜資料＞

状況設定

最近、原因不明のＡ病がアメリカから日本に上陸してきた。突然に３日間、高熱を出して亡くなるケースが増えてきている。治療薬はまだ開発されていない。Ａ病患者の10％が、ガン患者として抗がん剤Ｂを投与されている者であったと報告されており、アメリカでは抗がん剤Ｂの投与を一時停止するよう勧告する措置が取られた。ただし、抗がん剤ＢとＡ病との因果関係は立証されていない。

日本では、抗がん剤Ｂは副作用も少なく、ガン一般には効果が高いとして、比較的安価にて大量に販売されて、使用されている。

一方、抗がん剤としては、Ｂよりも効果が高いとして製薬会社が認可を求めている新薬Ｃは副作用として性染色体に損傷を与える等の懸念があり、厚生省では認可を手控えている状況である。

ちなみに新薬Ｃを開発しているのは一社であり、大量生産体制は整っていない。販売されれば高額となることが予想される。

また、いまだ日本ではＡ病についての情報はマスメディアに乗っていない。

各立場の制約

行　政（厚生省）　国民全体の健康の維持増進を図る責任を負い企業や医師に対して、指導的立場にある。国民の安全を考え薬品の認定などを図るとともに判断によっては、企業に多大な損害を与え、国民からも損害賠償を要求される立場にある。

企　業（製薬会社）　医薬品の販売開発を通して、社会に貢献している。しかし、企業であるからには営利が第一目的である。他社との競争に勝ち残っていかなければならない。また、同時に、賠償責任を負うリスクももっている。

医　　師　医療の専門家である。しかし、Ａ病については不明な点が多く、説明や判断は難しい。そして、Ａ病もガンも患者の生命にかかわる病気であり、経過によっては、訴訟に発展する可能性もある。また、新薬Ｃの効果とその対価としての価格をどのように判断するかが迫られている。

国　　民　医学の専門家ではない。そのため、実際の医療現場では、医師の判断に依存する傾向がある。高額の新薬Ｃはすべての人が服用できる訳ではない。また、情報の真偽が判断できないので、センセーショナルな報道に触れると、パニックに陥る危険性を持っている。

マスコミ（新聞社）　国民に最新の情報を提供し、世論を形成する一助となるという社会的役割を担っている。しかし、マスコミも企業であるからには営利を考える必要もある。

ワークシート

立場名
第　回方針 他の立場への要望 （　　）へ→ （　　）へ→ 他の立場への質問 （　　）へ→ （　　）へ→

Ⅳ　分析と考察

1　生徒の状況

第１分科会、第２分科会それぞれに、指導案を実際の授業に取り入れて試行錯誤を行った。

第１分科会のライフプランの作成では、生徒自身がいまだ夢と現実の分離した意識の中で生活している年代であることから、プランの立て方がいきおいステレオタイプの型にはまったものになりやすく、個々人の生き方の志向性を反映したものになりにくいという傾向が見られた。第２分科会の意思決定過程モデルを使った作業学習では、個々の意思決定の過程をなぜそれぞれのモデルに分類したのか、言葉で説明することに困難を示す生徒が見受けられた。しかし、この２つの作業学習はいずれも生徒が問題の本質に深く関わっていく視点や態度を育てる仕掛け(ハード)であり、むしろそこにつまずいてくれることがねらいでもある。そのつまずき、引っ掛かりを見守り、解きほぐし、導く援助(ソフト)を担当するのがわれわれ教員の役目である。その意味でこの指導案は、生徒が自ら課題を把握する契機をつくるものであるが、同時にそれが生徒それぞれの中で展開されるよう指導の工夫がなされることを教員側に要求するものでもある。

2　第１分科会の研究内容について

第１分科会では、ライフプランの作成を通して自己の未来像をかたちづくり、そこからさまざまな課題を追究していく授業を工夫した。生徒は、ライフプランの作成と人生の諸費用の計算を通して将来の自分の姿、生き方を具体的にイメージしようとし、自分を取りまきこれからその中で生きていく社会を実感をもってとらえる端緒とすることができた。その上で、社会保険やフリーターの問題について考えることを通して、自分自身にとっての「豊かな生活」、自分をとりまく真の「豊かな社会」を実現していくために主体的に考え、学んでいこうという姿勢をもたせることができた。それを課題追究学習や公民科科目の他の領域での学習を通じてさらに深めさせていくことが、これからの課題である。

3　第２分科会の研究内容について

第２分科会では、「望ましい政治のあり方」を考察するよう、３つの視点から授業の工夫を行った。第一の視点は、独裁政治と民主政治を、生徒の身近な問題から対比させることによって、生徒にそれぞれについての問題意識を持たせた。第二の視点は、過去の歴史からヒトラーを取り上げ、国の指導を一人に任せてしまうことの恐ろしさを生徒に認識させた。第三の視点は、現代日本政治の問題として、“薬害エイズ問題”を取り上げ、主権者としてどのように政治に参加すべきかを考えさせた。以上の３つの視点に共通して意識したことは、生徒をその当事者の立場に立たせ、生徒が主体的に問題解決をするような授業を計画したことである。